

くみかはしぬるけふのさかつき

あれまさるまかきにけふはさく菊の

われをやまたんふるさとの秋

今日もまたわけ行野へのきくの花

おりてかさゝん秋のたひ人

鳴海にかゝれば、雨ふり出ぬべく見ゆる、

たひ衣袖もしほれて浪あらし

あめになるみのうら風そふく

鳴海かた沖より空のくもりきて

まつはらくらき夕月のかけ

夜に入り熱田の宮の驛にとまる、十日、おそく雨よそおひして立出る、名古屋にいたりて、この國の學校○明を見まいらせんとて、教授中西氏をたづね行ぬ、あるじいまだ校よりかへらざるよしにて、しばらく待うち、内郭を見めぐる、諸大夫衆の館は、江都にて見し列侯のやしきのとく、朱の門に家の紋うち、

多くふたつの下座見をつけられたり、御天守もちかく見ゆ、すべて御城の廣大街市の壯麗、天下の雄藩といふべく覺ゆ、中西にかへれば、あるじは家兄としたしかりければ、余も相しれる人のやうにあつかひ聞え侍る、されば明倫堂見すべしとあなひせさせたり、堂は外郭ほりぎはにありて、四方二丁ばかりもあらんかと思えて、あらたに設けられたり、正面の門に入れば、左、番所なり、右にあたりて大きな堂見ゆ、これは食堂なりとぞ、敷石をふみて玄關にあがり、右におれて廣き堂に至る、こゝにて關氏○名嘉字公德、號元洲、尾張儒、文化三年没、五十四歳にあひぬ、中西の同役なりとぞ、こゝよりかの人あなひして見せらる、講堂には明倫堂とかきたる扁を掲げらる、是は古大納言○徳川の御筆なり、この堂廣さ義直五間に十八間あるとぞ、上の間を左右へおし出して、執政聴講の席とす、御近習は額の下なり、番頭以下、それ／＼うつばりに名札かけて、着座をさだめらる、休息間、記録所などは、講堂にならびて立られたり、教授局、典籍局は、講堂の東にあたる、學舎は西北にあたりて長く見たり、中堂は、いまだ造られざるとぞ、學舎校尉なども、いまだ土木おはらざるよしにて見ざりける、紀督學○名徳、字世

平洲^號もこのうちにすまゐせらるゝよし、此頃江都にあれば逢ざりき、主事、主射などいふ役もあり、禮樂射御それ〱設けられたり、講堂の東にあたりて射圃あり、けふも人あまたつどひて射られたり、監視の人も見ゆ、御やしなひの生徒も三百人にもあまるとぞ、げに市人のいひしにも違はずさかんなる事どもにおほゆ、夜は油を給ひて子の時まで書を見せらるゝとぞ、此ほか學政これかれにきゝ侍れど、こゝにしるさず、かへりに玄關を見れば、張紙して行事をかきつけらる、また一紙に、文言たしかにおほへ侍らねど、老を敬ひ幼を愛し、禮讓を專にいたすべし、老中、とかけり、さるの時過にしぞきて、中西氏にかへる、こよひは清洲まで出てとまる、

たひ人のやとゝふまでと夕霧の

たえまをとめてもらす月かけ

十一日、麩食して立出る、萩原といふ所より二方かうしんといふにうちのる、家兄のいはゆる四騎なり、敬直ははじめてのりたれとて、いとつたなくのりて見へたりしが、暫くゆくうちに、さてはよきものなり、輿馬にてはとかくか

けへだてゝ、ものがたりもならずなりゆく、かうやうにひとつ馬のせにのりてかたりもてゆくは、いとおもしろしといへば、げにさにこそありけめとて、例の經義論し給へといへば、やがて論語の禮和の章をろんじぬ、尾越川は海道第一の大川なりと見ゆる、船をさにとへば、太田川のすそなりととふ、されば木曾の水のあつまりおつる川なり、去秋太田をわたりて十三峠、木曾谷にわけ入りし事を思ひ出て、

わけいりしつらさを思ひをこし川

そのみなかみにつゝくきそやま

大垣にいたるまで川をよつこしぬ、こよひは垂井をこゝろざす、

鐘の聲きこえても猶ゆふけふり

たつ山もとのさとそはるけき

十二日、たるゐをたつ、こゝよりはこそ下りし道なれば所々記し侍る、敬直ははじめてこの美濃路を通るとていとよろこびぬ、山中のさとにてにはかに雨ふり出る、

ふる雨にふもとほとをし立よりて

からはやみの、山中のさと

不破の關はいづくにすへたりけんと、山田かるおきなにとひたれば、坂道のかたはらに雜樹しげりたる岡をよびざして、かしここそ關守やしきといひつたへたれとふ、やがてすきものをくらばやと、朽残りたる板をもとむれば、敬直あが痴なるをわらひて、これこそめづらしき家づとなめりと、紅葉一枝手折て、あかちて葉を昏にをしたり、

ふはのせきあれしときくもいにしへに

もりすてつらしあとそふりぬる

とひしとて誰かしらましふはのせき

いつよりかくはあれやはつると

番馬の辻堂は、元弘のむかしを感じぬ、西なる山に松の一二株たかくおひたるを北條殿元弘三年五月九日自害のつかなりと、土人のをしへぬ、磨針嶺の望湖堂にのぼる、同じ雨後にして立秋の望にひとし、よしなほははじめてな

れば嘆賞をかざりき、鳥井本よりまた雨ふり、湖のかたより風しきりに吹て、いと行なやめり、高宮は近頃池魚のわざはひにかゝりて、去年の逆旅もはるになりぬと覺しく、いとあはれなり、げに此夜こゝにやどりし人は、旅の九三にあたりたりと覺ゆ、やけのこりたるはいゑくゝに、おうな出してとゞめたれど、あすの夜湖上の月見んと、おもひ侍れば、こよひゑち川驛まで行ざれば、道のほどいと遠し、されば越知川驛までゆかめと、籃輿をかりてのりたり、風はげしければ、夜さむたへがたからんと、油幕ひきまかせ、しゐて酒くみ酔たれば、風雨もさのみものうからじ、これ瑣々のていなくして、初六のわざはいをとらし、十三日、越知川を立出て、野路のしの原をとる、

こゝは、やみやこにかき一ふしも

いそきてすきん野路のしのはら

うち出の濱に出る、

あつまちをのぼりてこゝにうち出の

はまより見ゆるしかのからさき

月もやがて湖水にうかぶ、夜の氣色いふもさらなり、きのふつとめたるか、いも有けめと、いとうれし。

にはのうみや秋風はれてかきりなく

さゝなみてらす長月のかけ

いそかすはいかてこよひにあふみちや

後の名にてる年のさゝなみ

十四日、大津をたちて逢坂をこゆるに、例の

なき人のこしゝおもへはあふ坂の

せきのしみつにおもかけそたつ

こゝに平義綱○平井と名のる人あなり、高潔の士にて、人おほくしれり、年ころしたしければ立よりぬ、あるし病つきてありしが、つとめ出てよろこびあはれしが、去年見しにはたがひて、おもやせ、かみみだし、いとおそるべきさまなり、この地山嵐の氣ふかければ、かゝるやまふのいできぬとおぼゆるとぞ、なにはの葛子琴○葛飾張、字子琴、號森庵、通稱橋本とはわきて親しかりし事な

れば、その死をいたみていまま泣れぬ、挽詞二篇を出して、下江せば子琴の靈座に手向てよといだされぬ、すぐに伏見へ出ぬべく思ひ侍れど、洛の三條わたりに源某といふ人あり、とし春までは江都にありて、いとねもごろにかたりたり、歸國せばかならず立よるべしと約したれば、敬直とゝも京に入りぬ、某のもとにゆきたれば、いとあはれにしほれたるさまにて出迎へり、こはいかにとたづね侍れば、鼓盆のうれひあるよし聞へたり、さればあづまのかたにてかのつまなる人にもたびゝたいめして、旅のいたはりあつく聞へ侍りし事なれば、いとあはれに覺ゆ、夜に入り松本某をまねかれて、夜ふくるまでかたりあひぬ、これは正學をとなへられて、實行もある人なるよし、あるじも近ごろこの益友を得たりといへり、げにざえこそあらめと見へたるさま也、十五日、未の時やゝ過る頃まであるじと葬祭の事など論じてゐたりしが、こよひはなにはに下るべしと立出れば、あるじ大佛の前までおくりてまいる、敬直は洛にしたしき人おほければ、こゝにとゞまりぬ、予もたづねとふべきかたゝもすくなからねど、なにはにこゝろいそぎぬれば、かしこにて待

べしといひてわかれぬ、日暮伏見西の番所といふにつく、齋藤氏にあひぬ、や
がてふねよそおひしてのせられたり、

なこりあれや夢かたととる都には

一夜ふし見のさとに出れば

小夜ちとり友をのこしてよと川や

なにとてひとり鳴わたるらむ

年を経すまたこの川やのほるらん

わかいほとめよよとの船さし

こよひはひとりなれば、いとさびしくねもやらず、腰おれつくらんと、かふが
へるに、曉は夢もむすびて、なにはに下りしもしらし、あくるは十六日なり、四
橋といふにつきぬ、二十八日の夕へまで飯岡氏○義のもとにとまる、家嫂
○梅家姪○山みなこゝにあれば、家に歸りたらんにひとしく、難波江のよし
あしとひ、むさし野のちくさの事もかたりていとたのし、また中井○竹山尾藤、
洲二鳴門○荒井安道○三島諸老先生はじめ故舊あまたあれば、日々とひめ

ぐり、あるはとまりて、夜もすがら語りぬ、たび／＼招飲もありて、十日あまり
ゐたりしが、ひまなかりき、しかし子琴はじめ死うせたる人おほく、混沌社も
もとにかはれり、

しけりつる入江のあしもうらかれて

なにはわたりの秋そさひしき

敬直もみやこより下りたれば、二十八日の夕べまたうちつれて、西のうみに
と立出る、澹寧老人○飯岡はじめなごりを惜み玉ふ、家姪とし五歳なり、此た
びにて離合四たびになりぬ、ことしはちえやゝつきぬれば、いとわかれを惜
むさまに見へたり、予もこゝまで歸りたれば、故郷のごとく覺へ侍りしに、某
濱より蓬もなきを舟にのれば、浪の枕うちもねられず、星のひかりいとあか
く、露ころもをうるほせり、蒲團かりて夜さむをしのぎぬ、二十九日の朝、明石
につきてあがりぬ、また杖つき笠いたゞきて行けるに、此ほとあしやすめた
るに、さふなくいたみ出て、いとあゆみわすらひぬ、姫路に宿す、三十日、けふは
九月盡なり、

われはまたふるさと遠し秋ははや

けふをかきりに行盡すらん

我たひのともたのみてこし秋を

たかいさなひていつ地ゆくらん

けふは、敬直もとにあしいたみ出して、三石まで行事ならすして、梨か原といふ所にやどる、こゝは山深くいとさびしき在所なり、猪鹿つくところとおぼへて、谷々に鹿火屋見ゆ、

さらぬたにわかるゝ秋はうきものを

この山さとに旅寐をそしつ

無聊のあまりに、やどの翁よび出し、このわたりのさまかたれよといへば、翁いはく、この秋は、いづくもよくみのりて、この山里もやゝゆたけく覺え侍るよし聞えける、

いぬうえて木のみをひろふうなひたに

としはなしか原そゆたけき

宵のほど、柴おりくべてけぶらせたれば、やゝあたゝかなりしが、夜ふくるまゝ、板間のあらしさえ渡りて、夢さへ長からず、味爽また監輿を命じて出ぬる、さむさいとたえがたし、

山からかあかつきかけてあかほしの

ひかりさむけく冬は來にけり

冬きぬとわれこそはしれいてゝゆく

いくあかつきのさむさくらへて

山路をわけ下るに、木々のもみぢ、今をさかりに見ゆ、

にしきともなしてかへらん旅ころも

木々のもみぢはいろをうつして

伊邊といふ所に、いゑくゝやき物うる、藤井にいたれば、いたく飢ぬ、老たるおうなのもとにて、むぎいぬくひてうえをしのぎぬ、むしあけのせとを左に見て、岡山につきぬ、一江翁岡田正部、通稱嚴之丞、天正五年正月死、六十七歳をたづねてとまらば、やとおもひ侍れど、所あなひもしらす、ことに夜に入りいたくたびれぬれば、京

橋わたりにて宿かりぬ、あやしき石にて造りたる風呂に入りて浴しぬ、京橋
 ふるくなりてつくりかへらるゝにや、曉より人おほくつどひてどよみあへ
 り、夢さめ窓おしあけて見れば、大なる木引わたし、たくみ數百人あつまりて、
 きりけづる音いとかしまし、旅人をば船にて渡されぬ、一江翁を訪へば、喜て
 迎へられぬ、たがひにあづまにありし事どもおもひ出して語り侍る、翁の嫡
 子は國學の教官なり、次子も學房にあるとぞ、ふたりとも校よりかへられて
 たいめしぬ、この國の學校はなたゝる事なれば、まづ見まいらせたまし
 へば、やかて二子あないして行る、いたればそともはさのみ廣きやうにも見
 へざりき、學校と書ける額かけたる門に入れば、老たる松あまたあり、泮池
 には石橋をわたし、賢門はとちたり、門の左右、右塾、左塾なり、池を右にめぐり
 て、校厨のまへにいたり、梧舎といふにあがる、側に番署あり、こゝより觀はめ
 て、東の學舎をめぐりて、文庫を見、講堂にいたる、中室をふしおがみ、西の學舎
 にわたる、松舎といふは君侯の入らせ給ふ所とて、やゝほかの舎よりひろし、
 前後に射御を習はす場あり、すべて東西の舎あるは句讀あるは手習ひ、ある

は禮、あるは樂、それゝ區別して學ぶ所とす、學房には書生をおほくおかれ
 たり、○名元詰、通稱貞詰、號桃源、文政元年八月朔日歿、六十九歳 姫井某政元年八月朔日歿、六十九歳と聞えたるは、此學にて名たる人なり、
 予が來れるをしりて、松舎の次の間にてむかへたいめしぬ、うちつれて西の
 かたを見めぐりて、食堂に出ぬ、輔仁軒は教授の會所なり、上の間には樂器を
 ならべ、次の間には書篋をゝけり、樂器のうしろに坤輿の圖の屏風を立られ
 たり、利西江か文あり、もとの梧舎に歸りて一周なり、すべて校内の式、先年家
 兄見られしに、すこしのたがひもなく覺ゆ、たゞ松舎の上の間にありし屏風、
 けふは王○王守仁、字伯安、號文○王守仁、字伯安、號成○王守仁、字伯安、號公○王守仁、字伯安、號の書の石榻なり、先年は東西の銘の石榻
 なりとぞ聞へし、姫井氏にとへば、右のしな折ふしとりかへ立らるよし也、堂
 舎門房とくく額をかける、みな板にもじふかく彫たるなり、すべて光彩
 は用ひられず、なにからななまで樸素にして堅牢に見ゆ、屋をひきく立られ
 たるは、そともよりいかめしく見なさぬやうにと也、講堂にはみがきたる板
 の上に、たゞみを一すぢつゝながく離してしけり、これ着座の次第を分つと
 見へたり、賢門をうちより見れば、門のさうの塾より、敷瓦をふみ、階を経て、講

堂にのぼる、校の圖は先年人のもちたるをうつして、大概おもひやりゐたれど、けふ見まいらせて、その規模の大なる、制度の密なる、造營の古雅にして、そのまうけかくのごとき、げに侯國の學はかくこそあるべきとおぼえ侍る、諸藩の學も、ひそかに見めぐりたれど、その制おほくたがひ、學政もとゞなはざるもあなり、この學は百數十年のむかし、烈公池田光政、稱新太郎、備前藩主、諡芳烈公のはじめて御造營ありしとぞ、諸國にさきだちて、この御まうけありしさへ、いかばかりめでたき事におもひ奉るに、その制のまたかく備りて、後世間然する事のならす侍るは、いかにいみじき御さえとこのありて、古今に卓然としておはする事の、いとゞふとくて、後世、天また烈公を生じ玉はぬをなげき、すそろになみだおちぬべく覺へ侍る、舎とにまへに草木を植て、その舎の名とす、菊舎の前にきくのさかりに咲たるを見て、この學の今もさかんなるをきくに寄て。

咲きくもめくみをしるや幾千とせ

きみかゝけてし露に匂へる

來て見ればむかしの秋にかはらしと

さきてやにはほふしらすくのはな

閑谷の學校在備前國和氣郡伊里村、寛文六年創、元祿季年成は、國學より猶結構まさりたりと聞へ侍る、きのふ通し片上といふあたりより行ときゝて、いと口をし、未の時過に翁のもとに歸る、姫井某も來れり、響應あつくて、いと立がたかりしが、敬直がいそがしければ、つとめていとまもふしたち侍りぬ、嫡子超夫は町のはしまで送られぬ、こよひ庭瀬にやどる、三日、くら敷の岡元齡岡壽綱、字元齡、稱總右衛門、善詩、有龜汀吟稿、五卷をとふ、おとうとの延年、稱文兵衛、善畫にもこゝにて逢ひぬ、けふは鴨方へとこゝろざしぬれば、しばしかたらひて立出る、又串川高梁を渡り、あまたの時を経て、夕かた鴨がたにつき、西山先生拙齋のものとをとふ、先生ちかき所西山にありて、かくときゝいそぎ歸り、まづあづまに有家兄の事などねもころにとはれて、二三日はとまりて旅のつかれをやすめ、ものがたりゆるく聞べしとて、その夜はふしぬ、翌四日、敬直もいなみがたくてとまる、至樂居と聞へ侍るは、先生の隱居をしめらるゝ所なり、ともなひてゆかれぬ、ほそき逕

をひらき、雜卉を栽られたり、載欣といふ扁をかゝけたる門をとりて、かの居にいたる、かやが軒端、たけの扉、いとかりそめのすまゐなり、その室はげに膝をいゝに過す、へいには天道流行の圖をかける、南軒はうちひらきて、前に池をほり、蓮をうえ、すべて此居のさま古賢の風をしたひて、先生のとくまたはちざれば、けふは靖節○陶潛、字淵明、晉末、濂溪○周敦頤、字茂叔、宋道州濂溪人、追封汝南伯、大極圖說、等著にしたがひて遊ぶこゝちしていとたのし、日暮見すべきものありとてつれて出られしが、やがて前なる山にかゝりて、もとの郷校のあと也とてあれたる菜畦あり、左にゆきて寺に入ば、紅葉やゝありたり、寺のうしろに古き墓あり、おもてに口口長門守とえれり、これはむかしこのあたりを領せられし人のよし、上なる嶺はその城跡とぞ聞えし、また右に折て、やまのそばつたひ行ば、墳墓衆々たり、おりしも、日をち風さえて、かれ薄うちなびき、いとものかなしくおぼゆ、先生さきにゆきて、道のかたはらにかたむける墓を見つけ、これ見よと呼れぬ、日かけなければすかして見るに、顯考鈴木氏とばかりえれり、他のもじは見えざりき、先生いへるは、烈公の御時まづしきものゝつ

かとおぼえて、このやまのうちにおほくありしが、しだひにうせゆきて、いまは僅にのこるとぞ、さては烈公の御時、儒教さかなりし事なれば、なに知らぬ賤者までも、御教を奉じて、かくはありし事ならんと、御盛治のほどかんに奉るもおろかに思ひ侍る、またをち葉かきわけてひとつふたつきぐり出し、ともしにて見れば、顯妣何氏とかすかに見えたり、みな至りてちいさきいしにて、おほくかたぶきて、跗石も見えざりき、先生のわかゝりし時までは、ふるき神主もちたる人あり、極めてそまつなれど、その制、本式なりしよし、さすればすゑく、まで葬祭の禮をば、をしへたまひし事と見へたり、郷學の會約○花、約或云熊澤、藩山所撰といふものは、先生のもとにのこれり、家兄の得られしも、これなめり、なにゝつけても、後世また烈公の出玉はぬ事の、くちおしきとになん覺へ侍る、先生にひとつの癖あり、盆石あまたたくはへて、常に坐傍におきて翫べり、けふもかすく見せられたるに、龍文石などいふは、もつとも奇品なり、うちに廬山とよべるを見て、こゝろのうち、

あやしくもたきつせなからもろこしの

やまかたうつす石のおもてに

とおもひたりしが、つたなきとがらかいつけんもおこがまし、五日、家塾にかかぐる額かきてよとこはれて、いなみがたく、遜敏舎、柳樊舎といふもじかきてまいらせたり、げふもなにくれと、午の時ばかりになりぬ、いそぎ神邊までゆくべしといへば、雨になるべければとて、しゐてとゞめられぬ、げふはといひて、こゝろづよく暇乞して立出れば、先生弟子ひきまとひて村はしまで送られぬ、ほどなく雨ふり出て、笠岡にいたれば、目もまた海にしづみなんとす、こゝに敬直がしれる人、小寺常陸○小寺常陸介といふものあなり、これをとひてとまらばやといひけれど、俱にふるさと近くなりければ、こゝろいそぎ出して、いやとよ神邊までは行べしとて、うちつれあゆみをはやめけるに、おもひかけぬ山路になりて、あめはしばしをやみぬれど、みちくらくすべりて、幾度たおれまろびたるもしらず、とかくして山をこし、野路にかゝれば、空かきくもり、夕月さへ落ぬれば、くらすもいとまさりぬ、たゞ一すぢの水のひかりをたのみて、細き堤づたひにあゆみけるが、たびく水にまろびおちぬべ

くて、いとおそろし、人家もあなれど、燈のかけみなはるかなれば、立よるかたさへなかりき、星だに見えねば、東西もわきまへがたし、たゞ水にしたがひて行うち、うすひく音のきこえければ、いとうれしく、家もやあるらめと見侍るに、杜木しげりて、火がけは見えざりける、やうく門をさぐり扉うちたゞき、續松をこひけるに、うちよりむくつけき聲にて、なきよしこたふ、またその隣に乞ば、あるじをき出て、くらす夜、ゆきなやみ玉ふらんとて、枯竹とりつがねて、やがてともしつけてをくりぬ、うれしといふもさら也、もとの道に出うちふりもて行ければ、いとあかく野山も見えわかりぬ、一里ばかり行て官道に出ぬ、敬直いふ、こよひ山をこえ水をわたる、そのあようき事、箱根、大井にまされりと、予おもふに、これつゝしむにやすく、あなどるに危し、笠岡にとまりたらんはさる事なり、また郷導をやとひ、燭とりてこえなば、何事のあるべき、後日のいましめにくはしくしるしおく、亥の時ばかりに神邊につきて、菅氏○菅氏茶をたゞく、あるじは家兄のわきて親しき友垣なれば、われもへだてなく思はれて、かくときゝて、いそぎ出迎へ、いろくいたはり聞へ侍る、よひのつ

らさもわすれ、うちものがたらひて、夜ふかくてふしぬ、六日、懸留また西山にひとし、しゐて立ぬべく見えたりしにや、佩刀かくされたり、これも古人の車轄を井に投せられためしにや、その情のふかきをかんず、あるじは聞へわたりしはかせなれば、さいはいに益をもとめんと、敬直にも前霄の勞をやすめ玉へととゞめ侍りて、なにくれと語りぬ、所のすき人もとほれて、韻字を拈る、また射字といふ事したれどもおほくあたらざりし、七日、夕かた尾道に出る、こゝより敬直をいよへ渡さんと、船だよりとひたれどなきよしとふ、こゝまでともせし事なれば、竹原より船かりてわたらんとありければ、またうちつれて、ふる郷のふねにのりぬ、こゝよりたかはらへ八里なり、いつも夜のうちに船つく、船長も予がかほ見しりて禮しぬ、はや故郷にかへりたらんこゝちして、旅のいましめもゆるべ、月しづくころ船さし出すれば、とくも夢にやなりぬ、その後はしらし、

神無月初旬

賴 惟 柔

藝備孝義傳序

久かたのあめは、すこやかにして父にたくへ、あらがねのつちは、したがひて母になぞらふ、陰陽の道たへにして、よろづのもの生出る、その中にかたちうるはしく、心に性をそなへて、萬物の靈たるものを、人と名づく、さればおよそ人としては心のいとくち引とはなくて、四の端あらはれ、五の常とらざるはあらし、古の聖人は特に氣のすめるをうけたまひ、明德くもりなく照して、よく天地にならびたまひぬ、もろ／＼の人はむかしも、今も、其うくる所の氣に、ごれるが、ちて、心の塵つもりやすく、鳥けだものに近きさへ有ぬめり、されど品くだれるしづの男、しづの女、ふみ學びたるにはあらで、世の見るめおどろかすばかり、あはれなる行するもまたすくなからず、天地より得し心のまこと、いぢるしくたふとく、おほひてもかくれざりけり、吾安藝の國は、むかしより風土やはらなにして、民の心すなほなるにや、天長^天和^皇の御時に、風早審麻呂孝の行をもて位三階を賜はりしも、まさしう此國の民なり、世くだりて後、はなべてのあがたにとならず、かゝる行せる人のありともしるものさへなく

て、あまたの年をもへにけらし、今の世の御政は、あしたにのぼる日の光のとく、千里の末までもかやきて、絶たるをつぎ、すたれたるをおこしたまへば、あやしきものはなごりなく銷うせて、民草のまめなる行は、皆あらはれつへし、此國は、吾淺野の御家の所領となりて、世々民の父母と仰られさせたまひ、あちかたの海、波しづかに、うくてふ魚もかすそひ、ながとのしま、神さぶれど、小松原、いく代のみどり葉をかへず、四のさかひたしくて、孝子貞婦つぎづぎともしからず、今の君辰重寶曆の末より、國たもちたまひ、惠をほどこし、教をしきたまふとあつけければ、誠の心をおこし、すぐれたる行して、賞たまはるもの、史ふんでをとめず、年にましておほかりける、御祖羽林次將の君、そのかみ國の博士に仰せ、孝いたれる民四五人に傳つくらせて、その行をつたへたまひ、また人の見てねかふ心もがなと、其傳をあまねく封域のうちにわかちたまひぬ、今またその御ためしをつがせたまひ、こたびは御あらはしをかうぶりしかぎりは、もらさず書あつめてんとおほしたまふと、一日やつかれ兄弟に仰せと有けり、かしこまりてしぞきおもふに、かゝるいみじき人々の

傳を、さえなく、とこなき、身のつやり出んと、かたはらいたきわざなり、又女もじの詞は、ことにおぼつかなければ、さらに藤原茂親、深津和央などいふものを申くはへて、それよりつふねをひらき、日々にかしらつとへつゝ、蟲はみすゝけたる文書などさぐり見るに、古き際はまうしふみやわかぬかたおほく、あるはしみのほらあかしめ、あるはうちりてなきもあり、いと本意なけれど、そのまゝにかきさしぬ、近き頃は注進もこま／＼なれど、おなじすぢなるは、ひたぶるにかいつけむも、またしみゝにわづらはしければ、おほく詞をはぶきぬ、かくあみあつめつゝ、月日をかかねて、遂に九卷になん成りぬ、繪は岡煥山こそかきたれ、さて此のするところを見るに、富めるはすくなくて、まづしきものおほければ、あしのまろ屋にうづらの衣きたる、いといふせし、されどかくいみじき行して、かけまくもかしこき御あらはしをかうぶり、名をとこしへに留めむと、おもたしきさちならずや、身には花をかざり錦をまとひたるも、己か心のをこたりより、かぞいろはのふかき惠をわすれて、不孝のわざをしつくし、うはらはらからかたみにあたのとくなるも、世にはまたおほくあなり、これら

はかたちめでたしといへど、心は見にくく、角おひ翼つけたらむものにひとしかるべし、かゝる人は、たゞ其父母にそむけるのみならず、民の父母の御心をもいためしめ、猶あがりていは、かの乾父坤母のためにもつみふかき子といふべく、たとひ人とかめずとも、天地神明終にゆるしたまはじ、また人いかで一生まどひはつべきや、よはひふけ氣しづまりて後は、夢のさめたる心地して、つらく來しかたのことも思ひつゝ、けん、己がなしたる不孝のつみとが、髪をぬきてかぞふるとも猶つきざるべし、此時にいたりて、いかに悔とも、はたをよびなんや、されば年わかきともがらは、此ふみのひもとくくも、はちあらためて、ふるひ行なはんとおもは、もとより四端五常のそなはり有れば、またなぞ此人々にならふをかたしとせんや、もしいたづらに見すごして、これはいやしき人のうへなり、われはするにたらずといひ、またよしとおもひても、われはあたはじと、みづからすてはて、そのあやまちをなしとげんは、むげにおとれるこゝろならずや、人の子たるもの、ふかくおもひはかるべきことにこそ。

寛政九年丁巳三月

賴惟柔謹序

藝備孝義傳二編序

年ごろむつびたる、ふたりの翁あり、ひとりは、竹のかげに、いほりをさし、ひとりはその栖に花の木をめぐらし植けり、一日霜のかしらふりはへ、ともなひ來り、物がたりせるに、新しき書冊のふづくゑの上に、あるを見て、いかなるふみやと見まほしがほなりければ、これなむ、さきにわが君のおほせをうけて、その人それの人あつまりあめる、孝義の續録にてこそ侍れ、繪は午庵○太田てふ人ぞかきたる、見つゝめてよと出しければ、二人の翁ほゝゑみ、手々にとりて、をしいたゞきひらき見つゝ、はなの翁まづぞいふ、今の君○齊あらたにまつりごちたまふに、猶父君○重の御志をよくつぎたまひて、仁孝の御事をよく述べたまふ、此ふみも、石清水たえぬ流れの、いやましにふかき思ほしをなさん、久米のさら山、さらに編しめたまへるにこそ侍らめ、上孝なれば、下厚におもむく理にて、今よりいとゞすくなる民草の、しげくぞ生そふべき、うつし繪

にうつすこゝろもおかしとめでよろこびける。竹の翁、うちうなづきつゝ、
もに、よろこびけるが、いさゝか、おもへるさまにて、此ふみに書のせられたる
は、まことになみならぬ人々なめり、されどいま現在なる輩は、をはりの、とげ
ざらんも、はかりがたし、わらはべは、をよすげて、いかにならんもしるべから
ず、さればいとあやしく異なるおこなひせしものゝ、そのおこなひさだまり
たるをかぎりて、しるされたらんには、しかじといへるを、花の翁聞あへず、お
よそ人のあやしく異なるおこなひをあらはさんには、そのあへる所にこそよ
るべけれ、王祥が氷をわりたるごときはあやしく、黄香のごときはしからず
して、俱に至孝の名を得たり、さばかりあやしからずとも、さだめてをとるに
もあらず、たとへば苦節のはげしきは、岩の上にてたてる松の、風にさかれ、雪に
くだかれても、ひるます、年ふりてそびえたるがごとくなるべし、庸行のうる
はしきは、砌に植し松の、いよやかに生ひしげりて、ときはのみどりを、ふくめ
るがごとくなるべし、ことなるすだたなきも、見どころなかるべきかは、人の
子の親をおもへば、枕をあふぐうちは風のぬるきをかこち、あつぶすまなご

やかならぬ、うすきをなげく、そのこのこゝろを、しはかれば、涙もこぼれつ
べくおぼゆ、かの伊勢をのあまの、おほくひろふが中にも、瑕つく玉のたまた
まあるも、すつべからず、よしや難波江の、あしの末みじかきも、もとの一ふし
とらざらめや、陸續はたちばなをし懐にしつればとて、郭居敬は二十あまり
四人のうちにいれたり、信濃のわらべは、そのはらにしもと讀て、伊嵩子が忍
らびにもれざりき、且それ今の褒賞は、いにしへ皇朝のくらゐをたまはり、え
だちをゆるし、門閭にしるしを立られけるには、やゝおなじからず、今は此良
民のまづしく苦しめるをにぎはし給ひ、或は一時の善ふるまひをよみし給
へるもあるべし、されば御ほめにあひたるかぎり書のせられんとならば、い
づれを收めいづれをもらされむや、かくあらしめたまふを、梓弓ひきつゞき
て、木にちりばめ、玉手箱あはくれ人のもてあそびとなさば、かほの人なる心の
けだものなるをはちらひ、善に改めんもありつべし、まして氣質のうるはし
き人をやといへれば、竹のおきなもあらそはず、又まきくゝをひるがへし見
て、はからざりき、けふは幸を得つ、なみくゝならぬ孝義のすぢを百がひとつ

だに、孫らにかたりきかせん、孫らにかたりきかせむ、これまた老のたのしみなり、いざと二人杖をつきつれて歸りいにけり、此頃この書の序なんつくるべしと、おほせうけ給りぬれど、しづたまきいやしき筆に、なにをか書出んと、こゝろせたむる折ふしなれば、かのふたりの翁があげつらへるを、耳にともて侍りしが、いづれをよしともしりさだめざれども、更にいふべきことわりをおもひよらねば、あはしくしげながら、聞しまゝを修めしるして、此書のかうぶり言葉となし侍るも、かゝでやむにはまさらずやとてなむ。

享和壬戌〇二神無月

頼惟柔序

縮景園記

常に住給ふ御ところより、ひんがしにや有らん、ひとつのみ園ありける、遠つみおやの御時よりひらきたまひて、青柳のいとたえず、吳竹のよゝにつたへて、政の御いとまある時は、こゝにあそびて、かのもろくともにするのたのしみをなしたまふける、凡此の園は、山にちかく川にそひて、あまたの景を

うつされければ、費長房が術にはあらざめれど、おちこちの名どころもみな御めの前にあつまりぬれば、にや、縮景の園と名つけ給ふ、今の少將の君〇重にいたりては、久米のさら山さらに御心をよせ給ひて、水のながれ、石のたゝすまひ、昔にくらぶれば、遙に立まさりて、木欣々兮向榮、泉涓々兮始流と陶靖節がいひし如く、よろづあらたまりぬれど、景はいよゝあまりぬれば、縮景の名はもとのまゝにてぞ有ける、園の正南にあたりて、み館ひとつ有、かやが軒端高からず、芦垣のまちかく結わたしたるさま、いと素朴にして、けうしやの風、つゆおはさず、時の名匠の詩歌すこしばかり、はた麋鹿ひとつふたつゑがゝせてかべにをし給ふ、楯に清風といふもじの、から人のかけるをかゝけ給へり、此みたちのまへに池有、西東にながれひろくして、あまたの船をうかべつべし、水は開もて大川をまかせられければ、常にみちたゝえて、しかもいさゝにぎりなければ、其すめるにとりて、濯纓池とよび給ふ、池のなかばに大なる石橋をわたさる、此橋あやしうそりて、柱もあらざれば、よそめには虹のこく見え侍る、よりにて跨虹の名を得たり、池の面にもかすくの島有て、小蓬菜、烟

霞島などいへるは、跨虹の右にあり、蘭舟嶼、水心島、綠蘋洲、振鷺洲、蒼雪島などいへるは左にあり、あるは高くそびえて、鶴のたてるが如く、あるはたひらかにしきて、龜のうかべるに似たり、とをくはなれちかくよりて、そのさまおなじからず、なみにあらふ松のしづ枝、松島、象潟もよそならず、また池の西北にあたりて、瀧の白いとひとすぢかゝりて、木の間をわけつゝ、石ばしりくだりて、池のうちに流れおつる、そのすがたさらにおもしろう、ひゃきも殊にあはれにして、神仙のさかひにあるが如くおぼゆ、凡池をかこみてさまんゝの見所おほき中にも、東に迎暉峰は、いはほ大空にそひえ、悠々亭の軒波にうかびてはるかなり、西に稱翠巖の年ふりたる、みどり池の汀にそばたち、丹楓林の秋の錦いろふかく、超然居のたかくほがらかなるなど、殊にすぐれたるけしきにこそあなれ、これみな清風のおましよりなごりなく見渡さるゝところをあぐるなり、もし池をめぐりてたづね行たまはんには、まづ清風の右に櫻花巷あり、若木のさくら數をつくして植わたし、おふさきるさに立ならびて、花のさかりにはしら雲をうかちてかよふがとく、まよや花のちまたならし、こ

こを過て池のくまわを渡り給ふに、みつの橋有、はじめを映波、次を昇仙といふ、昇仙とは、こゝよりやゝ高きにおもむき、歩虚のおもひあるがゆへなるべし、その次は春のながめをせとして望春と名づけ給ふ、昇仙は石もてつくり、ほかはみな土もりたる橋なり、此三橋を渡りて、東の山の尾にのぼりゆけば、山田有、稼穡のかんなんをこゝろみ、年ある秋をいのり給ふ御こころのほどいと有がたし、秋はひたひきて鳥をやらひ給ふ、さながらしづがしわざにとならず、右のかたに此山よりおつる谷水のながれ有、なごめに高うめぐらして、さゝれ石のきら／＼しうしき渡せるは、星のはやしかとあやまたるれば、久かたの天の川になぞらへて、銀河溪となんよばせ給ふ、やゝ岡にあがりて看花榻といへる有、上のおほひはまどかにして、脚はひとつもてたてりけるが、下はろくろの如くめぐれり、これにしてうたげし給へば、前なる川の岸に、武陵も及ばざるばかり桃の花を植られけるが、たゞ御一目に見え渡りぬれば、かく名づけ給へるなるべし、こゝを北にくだれば、邵平が植し瓜、陸羽が好ける茶を初として、數々の菜蔬を植給ふ、東にめぐりて、山の背よりやうやく攀

のぼりて、そのいたゞきにいたれば、崖をもやしてみな底のいろくづを見るがとく、園中にあるとあるもの、とゞくかたちをかくすとなし、殊に海路はるけく行かふ船のほの見ゆるは、更にたぐひなきながめなり、されど此あたりにては此山のみいと高ければ、朝日はまづ我ものがほなりければ、迎暉峰とよび給ふもむべなりかし、又もとの道にかへりて榻の前にいづる、此ところより道ふたすぢ有て、右は芝の上をつたひてゆくうちに、かの神仙のすむてふ三山にもくらぶべき巖島見ゆる、よりてその所を臨瀛岡といへり、猶岡路をゆきゆけば明月亭なり、左のみちは池のほとりにそひてまづ悠々亭にのぼる、此亭みたけばかりをいるゝほどにて、脚は池の内よりたちぬ、四のまどほがらかにして、夏はいとく、涼しげなり、こゝを出て西に行けば、楊柳橋といふ橋あり、煙霞島の北なる入江にかゝれる橋なり、霞わたる春のけしきいとえんなり、こゝをこえて祺福山の前にいづれば、山祇の森木ふかくして、あけの玉垣神さびつゝ、いのらすしもさいはひをくだすと山にもひとしかるべし、もりの右にめぐれば、池の岸けはしうして道絶たる所有、石をたかうつ

きあげて木をつがね渡されけり、よそには蜀の棧道、こゝには木曾のかけはし思ひあはさる、此橋を攀桂と名たまはりぬ、地高うして月見の亭にちかければなるべし、かのふたちの逕出あひてほどなく明月亭にいたる、川ごしに見ゆる野山のすがたよりして、川船ののぼり下るさまにいたるまで、雨によりしく、雪にもあはれふかうして、折々の風情數おほけれど、山のはをいづる月をむかへて、おぼしまにより給へば、水に浮ぶこがねの色夜ふくるまゝ、すみ渡りて、雁飛鹿鳴秋の夜のながきもわすれて、遠寺の鐘を聞給ふ、此ながめこそ更に立こえ侍ればとてや有なん、明月といふ扁題をかゝげらる、此亭はすこしひろうして、から大和の歌つかふまつる人などめさるべきほどなり、亭を南にくだれば、弄雲橋とて石をふせたる橋有、橋より林のうちをうがち、細き谷路をゆく、年ふりたる松あり、されば古松溪とぞいふなる、此谷水のながれ二すぢ有て、ひとつは白龍泉といひて、かの池におつる瀧となりて、水のおほくかゝれる時は、いきほひはげしうして、水の聲も遠く聞ゆとなん、ひとすぢは錦繡橋といふ橋の下に流る、をよそ此水はいかなる所よりいづる

ともしられず、木のもと石のはざまよりいでくるにや、いとあやしうおもしろし、張鷯てふおのこのごとくみなもとをさぐりもとめんは、なかくい
 やしかるべし、かの橋を錦繡といへれど、くろ木を横にならべて、あやしの
 淵橋ぞかし、されどかゝる名をかうぶれるは、そもなに事ぞや、橋より南は楓
 をおほくうゑ給ひて、秋の錦はたはりひろくて、橋も此名を得たる也、かへで
 の林をすぎて、やま路をくだれば、いのちをのぶる菊花淵なり、また池の西み
 なみに入江のまがれる所有て、觀瀾橋といふ板橋をかける、此橋らんかん
 もありて人をとゞむるによろし、橋の上より池の東きたをのぞめば、やゝも
 すれば微風にさ々なみをおこして、羅殺をうかべるがとし、惺窩先生の時、お
 なじたぐひの名勝ありて、言に出て、えやはいはまの、さゝらなみ、たちて見る
 て見、あらふ心は「とよみ給へりし、まとや、まなこ高き人は、なみを見るにもと
 なる見どころやありなん、橋を渡りて石のきだはしをのぼれば、超然居な
 り、うちとむなしうきよらにして、山を望み水にかんが見つゝ、おのづからゝ
 んはうをそへ、馬にしておほぞらにあそばん心地ぞすなる、もとの道にくだ

りて、觀瀾橋をひんがしに渡れば、また橋あり、石蟾橋といへり、橋の下にあや
 しき石を置給ひて、其かたちかまに似たり、此石はむかし惺窩のもてあそび
 給へるを、ある人のもちつたへたりしを、其のちたてまつれるとなん、此橋は
 池水のおふれ出るところにして、園の西南にやあたり侍らん、櫻花巷より池
 を中になしつゝ、右にめぐり、左にかへれば、石蟾にいたるをもて、ひとめぐり
 とすなり、およそ御園の西邊は、くさくさの木立生しげりて、足曳の山おくふ
 かくかぎりしられざるごとく見え侍る、その中を西にわけゆけば、ひとつの
 門あり、入てみれば、いとはれやかにして、けうかいまたくことなり、こゝには
 射圃、調馬場をひらき給ひて、らちの上には、松、さくら、山吹などうゑられけれ
 ば、はひひろごれる松のふしえ、みどりたな引つゝ、春の花のいろ香えならぬ
 に、ますらをのとも、矢たばさみそりま弓射ること、がらのゆゝしう、そのこゝ
 ろのがうなるもおもひやらる、春の日もゆふかけ、秋の夜きよき月毛の駒、そ
 のほかとらげ、つるぶちなど、めづらしき毛色、引出てのせ給ふ、などか興なか
 るべきや、これを御らんする所を流芳軒と名づけらる、射御の場は、もとより

御城のうちに、あまたところまうけ給へれど、こゝにもまたひらき給ひて、煙霞泉石の間にも、猶ものゝふの道わすれさせ給ふまじきおもほしにやあるらんかし、すべて御園の景勝こゝろのかぎりたゞえ奉らんとおもひ侍れど、つかみじかき筆もて、えやはかきつくすべき、されど仰をうけ給はりつゝ、しじまづくらんもおそれおほければ、いさゝかするし侍るも、いとくかたはらいたきわざなめれ、この君殿重○いまは御國務をゆづり給ひて、御いとまもおほくおはしませば、時となく渡らせ給ひて、春は花鳥をもてあそび、夏は涼しき風に御駈をまげ給ふ、秋は月の夕をあはれみ、冬は雪の朝をめで給ふめれば、御こゝろのたのしみかぎりなく、たへなる薬にもまさり給ふべし、それのみかは、年比の御めぐみにかんじ奉りて、千代萬代も此うちにせうようし給はんも、此くにうどの朝夕ねぎおもふところなれば、おほんよはひのはかりなく、いやさかえ給はんも、なにかうたかふべき、されば此み園をば周文の靈園にもなぞらふべけれど、常に御へりくだりふかくおはしぬれば、おほけさなき事にやおもほすならん、世の物しりがほする人は、およそ國君の位を

ゆづり給へるをば、魯隱の故事をかりて、菟裘とぞよぶなる、やつがれがひが心には、さいふもいとほいなし、いづれになぞらへいはんや、臺池鳥獸にこそとはまほしけれ、

惟 柔

民のみかその、艸木もよろこひの

いろにめくみのひろきをそ見る

池のいをはやしの鳥もところ得て

すめはねかはん君千代ませと

望海樓記

物のあやしうおもしろきをのみ、世の常の人はもてはやすめれど、心ある人は、目なれしものにも心をとめて、たえなる理をもさとるぞかし、さればいにしへ水を見て水なる哉みづなるかなといと喜びたる人のあなるも、人知らず心の内に感ずる事の侍りたるなるべし、こゝに山田大夫書山田○俊為の別業

あり、海に臨み野に續きて、遠くは鳥山を見渡し、近くは畑ものゝくさんゝも
 さながら園の内のものとなりて、な摘むすこの行かよひ、貝拾ふ里の子の渡
 をよぶ聲さへ、あし垣の間ちかく聞えて、花の春の打かすむ頃より、入江にす
 だく螢の光もいと涼しく、月のくまなき夜、鴈なき渡るは、云ふも更なり、柳柳
 州が獨釣寒江雪と吟せしも、目の前にありければ、四の時のあはれなる咏い
 かばかりもあるらんと覺ゆるに、樓の名を問へば、望海とぞいふなる、左右に
 物見の侍るも、たゞ東亭西亭とのみ呼び給へるはいかにぞや、そも海てふも
 のゝ見所の侍るにや、つらく思ひ見るに、海はもゝたにのあるじともいひ
 て、衆流のおもむく所にして、萬物の流れあつまるを、ひとつとしてうけひか
 すといふことなく、舟を呑む鯨、山をいたゞく鼈を初として、よろづのいろく
 づ、大なるは淵に遊び、ちいさきは渚に浮みて、おのゝ所得がほなるは、わた
 づみのむねひろくしてまつりごとのいとよくおさまれるを知るべし、さて
 時しもあれ、沖つ風吹かれて、浪の音ものすごう、百丈の大船も木の葉のたゞ
 よふが如く見ゆめるに、朝風の麗はしう、海の面鏡の如くなりては、磯山の緑

わたれるは、人のわたくしよりはせいづる欲を鎮めて、久方のあめのまさし
 き道に立かへるべき教にて、朱子の依舊青山綠樹多、まことに此事をいへる
 ならし、またかのくしの筏に乗りて浮ばんと給ひ、魯連がふみて身まから
 んといへるを思へば、海を見て國家の戒ともなりぬべければ、月花の艶なる
 よりも、唯青海原のながめこそ、あるじの心にかなひたまふらんと推しはか
 れど、見どころせば、井のうちの蛙の、いかで海を望む人の心を知らんや、
 くみて知るそこひもなみのわたつうみ

みるめもふかききみかこゝろを

文化二年七月

賴惟柔しるす

自選唐桃集

杏坪老人著

春歌

年内立春 年の内に春はきひわのかたるさり立かねつゝも霞初けり

としはまたいたたぬ門のかた扉まつ吹あくる春の初風

さを姫も霞の衣あつまからけ渡るや年に二股の川

元旦 かりねしていねつむほとに夜や明ぬ門にはかひのほきことの聲

早春霞 あつまよりさつまをかけて立初るかすみは春のあまつ羽衣

薄かすみ春日の野へに若なつむ人をはしかとさしもまかへす

霞 深 雪に猶たちしのきくも埋れて霞に折るゝ角の松原

春風解氷 こほりぬし細谷川も春風に玉の帯とくきひの中山

若菜 つむすこの名をさへとへと白雪の下の若なのなるべしやは

七草は得かたけれとも千代へんと思へはやすし雪の布留野も
うなる子か鶯袖をしほりつゝ梅津川原にゑくを摘見ゆ
人の若なをつみて得させければ

鶯 つみこめて耳な草までありと聞はめかこを見てもうれしかりけり
うくひすの花のくしけの明てより聲のにはひに春は見えけり

竹間鶯 木かくれの虫くひとのみ見し鳥に人さへ春ををしへられけり
吹風にみたるゝ竹をふみなからふみあやまらぬ鶯のこゑ

梅 すむ月とにこらぬ水を友としてきよさ争ふ梅の花かな
くれ竹の一村たてる川岸に枝さしいてゝ咲るうめかな

夜梅 俱瘦の竹のうちより咲うめのおわくもさそと見ゆる宿かな
遠かたの夢をさまして小夜風のよわれは匂ふ梅の下庵

梅影五十首のうちにも
物いひし少女は夢となりもせて色香まかはぬ梅の一もと

春のよの月にかけてさす梅かえは香をさへそへてうづるかと思ふ

まかふ香の世になきのみか梅の花かけさへ似たるかけなかりけり
うめか枝の月にうつれる窓の内にやせを争ふ人もありけり

落梅 おほろ夜の月さす窓の薄きぬにうす墨かきの梅の一枝
うめの花ふみしたきたる鶯に宿はとわれは間はましものを

柳 月に吹誰よこ笛そあなうたてふかても梅のちらんとおもふに
何によりて見ん春雨と春の風そめてなひかす青柳の糸

行路柳 風のみか水にもかけをまかすらん六田の岸の青柳のいと
打たるゝ柳のかけを行駒の髪さへけつる野路の春風

柳絮 まろらかに風にふかせてゆく綿は誰に柳のかつけやるらん
人のかふ桑子のまゆにさきたちて柳のつくる春の新わた

春風 春風の髪くしけつる玉柳玉の屑とも見ゆるわた哉
さを姫よ柳のいとをくりながらわたをは風になとまかすらん

野遊 人よりも一むれさきにゆく友は風にあかるゝ青柳のわた
春駒 はる風にあかす駒のかみ川はみあきぬらし岸の若草

歸 雁 雲路にもはたち八とまりあるものをかりねもたて歸る雁かも

つはくらのきて來し國もさむからんかへる鳥の衣かりかね

なそありてなくや涙の雨つゝみつゝみかねたるかりの羽衣

春 雨 さゝかにのくもりくゝて春の雨ふる屋の軒にかくるいと水

春雨はつら杖つきて見るもよしいてゝもゆかんひちかさをきて

春 風 はなふきていにつる秋のかほかへてうれしき春の風のいろかな

來る蝶や蜂ふくやとも見えなからわれも香ぬすむ花の春風

桂男も春はかはつにめやかしぬ天のかはらをねふりつゝゆく

春 月 あはれいかに見すてん花の春のよをかすますとて有明の月

春の目を猶みしかしとおもへるは花見る頃の心なりけり

春 日 花は酔ひ柳はねふる春の日になと我ひとりさめてをるへき

見れはみな打ねふりけりしたみ酒かすみにゑへる春のやまく

春 江 江の水のぬるむをまたき知るものは浮寝の床の春の村唄

春 田 かへしつゝあせのほそみちほそたてゝ祭るや春の神のみとしろ

打かへすせなかに秋はまたるれと手なさきくるし春の小田長

春 城 花うりの聲よりあけてゆく道のほのくゝかすむ春の大城戸

小樓一夜聽春雨

ふしてきけは聲さへほそき殿つくり竹のたるきのよはの春雨

深巷明朝賣杏花

朝かすみたつ市人は見えねども賣る聲さやくから桃の花

花 はなたちてわれこそは問へ人はまたさくらとたにもいひもあへなくに

言さやくからくに人に見せはやなわか日のもとにのみさくさくら花

咲をまち散るををしみて嵐より花にさわくは我こゝろかな

きのふけふうかれゆく身はあま小舟はてなき花のを初瀬の山

見ぬ人の長しとわふる春の日をからまくほしき花の頃かな

花さへもおいぬこそよけれぬは玉のよはのあらしも知らす顔なる

折つれて山よりかへる花見人里に夕ゐる雲もありけり

神無月しくれふるにもさかゆるる少女を春は花にかへけり

もろこしの吉野にさかはから歌にその名やたゝん花の白雲
いそなつむあまの羽衣きつらねて舞ふかと花をみよしのゝ山
さくらのもとに指貫をきて人たてり

吉野にて 花に身をくゝりをはかまくゝられてひもゆふへまでくゝり小はかま
ともすれば花ともわれはおもほへす雲のなかゆくこゝちのみして
雪にまひ雲にうたひて山さくらよし野よく見る人や幾人

同じ懐古 みよしのゝみかりの宿の高みくらはかりかけし花のきぬかさ
よしの山深きうらみや埋みけん大御陵の花のしら雲
嵐山の花を目をかさね見る

平野の夜の花見にまかりて うきなをもわすれて山の花盛りあらしをよしといはぬ日そなき

江戸にて飛鳥山の花を見てあけの日西に歸るとて
あちさむの花にはあらてよひらのに櫻見あかす春のともし火
けふのみとおもへは悲しあすか山あすより花はむかし成りけり

いつくしまの花を

故郷花 久かたのみやこの花を海中にさかせて見するいつくしま山
さけはおもふ昔の春の横風に吹あらされし志賀の花その
落花 花よいかに枝のわかれもおしからず風にまかせてまふてゆくらん
吹風にちらぬ木末はありなからたつ日にのこる花のなきかな

世の人のたえて見にこぬ山かけは風にとはれてちるさくらかな
熊つゝらつらしとちるを惜めともちるこそ花のあはれふかけれ

關落花 手間のせきすゑたる國は根なれとも根にかへる花をとむる手そなき
雨後落花 目をふれはふらても花はちるものを雨にきせたる春のぬれ衣

野 蒜 少女子かつみにつみても久かたの春の野ひるの長き頃かな
雉 子 かすむ野のわらひを人の手とや見し遊ふきゝすの三たひ鳴聲
鳩 雨や遅き妻やつれなきしらま弓いつれめほしき鳩のぬれ聲

須美禮 から衣春のすそ野に少女子かつほをりしつゝすみれつむなり
うゑしこそ一夜ねにけれむかし人すみれは野への春の花甍

蛙 水にすむかはすのうたも春雨につまよふ時そふしもありける
 蝶 垣こえてむれ來るてふはわか宿の花の香ぬすむ春の白波
 燕 秋はなな尾はなの末の別れても春つはくらめ宿もわすれす
 辛 夷 つはくらの心はあかしあらかねのつちてふ日には巢をせさりけり
 蕨 わらひ手にこふしの花も打つれて春を争ふふる郷の庭
 遊 山田守焼しわら火の捨灰の春はやすけに又もきにけり
 梨 打はやる天の川原のいとゆふは棹姫にかる春のたなはた
 菜 ちらぬまを雲となしてもかくれなん世を逃るへき山なしの花
 躑 花 たれかいふはかなの花の一時とことしをしける春の千町田
 瀧 躑 さを姫の春にかけたるあから裳の引のこせるは岩つゝしかも
 藤 瀧 山 咲 ふりすてゝ暮ゆく春をはなたしとやにかけてさく黏つゝし花
 うはゝれんあけはちりての藤の花むらさきも又誰かにくまん

かきつはた
 年のうちに春はいく日もあらなくに心なかくもさくふちの花
 老をたすくものともならて藤の花おのれ杖つく庭のつり棚

春動物 ひらきけん池のおもてのかきつはた日くれの山のいろをまなひて
 春山居 春されは梅のはな毛ものひつらん鳥をもとらてねふるはしたか
 山村暮春 うくひすのかへらんまては巢守して春さへさひし谷かけの庵
 小山田もはやかへすらん瀧の上のあせみ花ちり谷くゝのなく
 さくら花ちる山里の夕くれにさひしや春もいぬのなくこゑ
 野春晚 いて見れば花はのこらす散はてゝ夏をいそげる麥の走り穂
 落残るひはりを春のものとして猶惜まるゝけふのゆふくれ
 三月盡 わか身世にあらんかきりはあふ春とおもへとをしきけふにもあるかな
 けふをせと人はをしめとすゝか川霞は春のすてころもかも
 夕風に吹たふせなんゆく春の道のしるしの雲の石ふみ

夏歌

山居首夏 山住はまた春衣ぬかなくに鹿は夏毛にかへんとすらむ
 首夏雨 夏來ても衣ほすてふ名のみして卵の花くたすあまのかく山
 尋殘春 さくり入る山ふところは衣かへせぬ花鳥の里もありけり
 卵花 おのかすむ月よりたねをまき初めて名も卵花のまかふいろ哉
 岸卵花 さしよせて岸の卵の花てもふれすかへるは雪の夜舟なりけり
 山新樹 ほしにこそあけなる鳥はいてにけれ木々は青羽のかもの神山
 鶯の梭をなくるまにおりはへて山もみとりの衣かへせり
 山風のふけは若葉のうら見せて夏いちろき峯の横原
 牡丹 さくら咲み世の春にはうてなからさすかはからの花の大王
 芍薬 富たとき色も深見の名におへとこれもはつかの花の浮雲
 此花はさくやくるしき世をすくふほさちのかほにさも似たりけり
 櫻狩いてつる野へはきのふにて麥かる頃になりける哉
 麥笛 かりそめに麥わらはへの吹笛も世に一ふしのなからましかは
 麥奴 手習ひのすみかともれば里の子かかほに引あふ麥のめはしき

螢 日の本は早くももえていつるらん麥のほたる、秋を時とや
 あはれな秋にたへさる身とするや燭とりて夏の夜遊ひ
 ほたるは此わたりにては草よりは出す川の淺瀬にある小石の際よりいつ
 るといふ行て見しにまことにしかりよてたはふれに

照射 石よりは火こそいつらの石ゆゑかほたるはよまぬ大和ことの葉
 小麥打からさをしかも心せよるはほくしをかくる頃かな
 郭公 藤波の花さきしよりほととぎすまつにこゝろのかゝりぬるかな
 ほととぎすはつ木の上の初音こそ夜ほしの衣につまほしけれ
 連枷もよるは音せぬ麥秋にうち出てなく山ほととぎす
 鶯をかそいろにしてほととぎすあるよりもこく鳴そめにけり
 待子規 たち花や桑のもとにも三夜ねしを一聲もせぬ時鳥はや
 わか宿のあやめかをるし時鳥たかかたにかはかたらひぬへき
 社頭子規 ほととぎす人の帝のたまつしま大和をはをならひてやなく
 深夜子規 丑の貝うしとないひそ時鳥吹きまされて後の一聲

子規聲急 まとろしき夜のほり船もほととぎすふけてこそきけ淀の渡りに
くれ竹のふしみの里のほととぎす夏の夜もきく雪折のこゑ

海邊子規 あまのすむ軒端の梅もいろつけは山ほととぎすうみへにもなく

からうとといふところにて時鳥を聞て
からうとの泊りときけは心から不如歸くと鳴ほととぎす

鶺鴒血染花といふこゝろを

早苗 ほととぎすなくや五月の山つゝし千聲ちしほに染るくれなる
けふはわれあすはとなりの田うへすと更にひまなきゆひの手間うへ

水鷄 さをとめはひさなへおきてあせ道にはし糞きつゝ啼子さす也

盧橘 みしか夜に人待もせぬわか脛をおことくひなのたゝくかときく

石榴 霜に咲花たち花は五月雨にこかねの鈴をふりならしけり

五月雨 なへて世のくらきみとりを照さんと花なき時を待てさくろう
八重かすみ春の一重もなにはうたもしほもやかぬ五月雨の頃

さみたれに日をふる池の水さしてあやめもわかすなりにけるかな

幾日見ぬ雪のかのこの一またら富士も時しるさみたれのころ
しくれをはよそなる竹もいろかへてふる葉を落す五月雨の頃

瀧五月雨 さみたれに瀧の水上若かへりくろきすちをも見する頃かな

夏月 花鳥の海にしつみし春の身もわすれてうかふ夏の夜の月

月かけはこやのえひらのめをあらみもるかとするれば明る夏によ
夏の月やとらん雲を吹風は天の川原のをそのたはれ男

夏村夜 となりにも蚊をうちはらふ音すなり共にねかたき夏のよは哉

いねのむし送りすてたる麻から火のきえのこりつゝ明る夏のよ
井手かけてあらそひ引やよるも猶川小田さわく水無月の頃

蚊遣火 夏の夜の月をは蚊こそくもらすれたつるけふりの谷にやはある

大原や涼しき月を雪にして炭やくはかりたつる蚊遣火
賤か屋ははいりの庭に麥打て蚊火よりさきに烟たてけり

蚊雷詩題 夕立は過し軒端に蚊の市のたちかへてまた鳴神の聲

蝮 笛同 みしか夜をなとふしわひて鳴みゝす身のたけよりは長き笛の音
 夕 顔 すゝき垣ふちする人もなき宿になにうれしけにさける夕かほ
 瞿 麥 野へならはかとはす風も吹へきを宿にかこへるなてしこの花
 蓮 朝風にふかれてはすのこほせるは卷葉にやとるよいの村雨
 夕 立 あさ立てゆけとも遠きむさしのをやすけに過る夕立の雲
 納 涼 照る日そとそろるかりほすむしろ打うたれてくゆる夕立の雨
 蟬 虫 風わたる星のはやしの下涼み庭のあくらのあくよしもなき
 夏 虫 蟬の羽のうすき世なれや夏なから誰いつばりにしくれてや鳴
 夏 虫 ともし火の花のかけかたゝに身をなけのなさけの夏むしやなそ
 夏 虫 一おもひに身をや焼らん夏のむし秋の夜露になかんよりはと
 夏 虫 みなおのかまとひなからも臭を追ふて身をあつものになくも有けり
 夏 山 夏山は青はにかとをかくしけりあやしき峯は雲にゆつりて
 鵜 河 月夜なす垣根の花にかよう名のうふねはなそや闇をせとさす

三次にて夜々近く鵜舟を見る

川をちかみ籬をいつるうかひ舟かゝりは夜はの窓のともし火
 老たるうつかひの白頭の鵜をつかふを見て
 つかふ鵜のかしらもともにしら川やかへらぬ水のくい八千度
 紅蜻蛉 夏ははやくれなるになる羽を染て秋を見せたる野へのかけらふ
 夏のはて からうして水無月もけふすみた川八穂蓼なひき秋風そふく
 いまはゝや夏のしるしもなかりけりみそきの後のよはの川風

秋 歌

初 秋 音にのみ聞風よりも秋來ぬと手に掬るはかり天の川水
 今朝ははやうそふく方もしら虎の尾をふみ月の秋の初風
 小男鹿のこゝろやさきにうこくらん小さゝか原の秋の初風
 わくらはにちるかと思れは桐の葉のたはふれならぬ秋は來にけり
 散り初る桐の一葉の上に来て秋をゝしふる庭叩かな
 新玉の年をふたつにかひわりの秋の若葉を賣るや鳥羽人

夏といへとおかぬものは草の上のいろなき露に秋そしらるゝ
 殘 暑 たなはたもあたらおりつる錦より薄羽衣をきんあつさかな
 七 夕 むかしよりなき名をたてゝ天の川ほしやあふらん波のぬれ衣
 あふとのたえてかたくは七夕のほしも落てや石となるらん
 七夕 牛の尾に火をつくはかりいそくらんひく彦星の心いられて
 七夕 橋 なげかけてこよひは星を渡せかし橋となるてふ仙人の杖
 をとり ゆたかなる秋うれしとやおとるらん手のまひ足のふみ月の比
 秋のうた 風の音も聞わけかたし萩に似て立ならひたるそのゝから黍
 蘭 秋立てふみひろけ月きにけらしいく野をかけてさく藤はかま
 萩 胡より來しとも見えすもとあらの萩の錦は大和なりけり
 見かねては杖もてたゝく人やあらん露にうつゐの野への老萩
 女 郎 花 かきむたきゆくかとそ見るをみなへし心あたしの野への夕風
 茅 蝸 末なかくななく聲を聞きしより短くなりぬ秋の日くらし
 荊 萱 まめならば名をもをしみてかるかやのみたれてさかは見せさらましを

秋のうたとて

こほろきの鳴のこりたるさゝ垣に小からさへつり朝風そふく
 吹わたる秋の朝たの天津風きよきは月の名残なるらん
 初尾花むらゝまねく濱風に入江のすゝき今やよるらん
 露なから又かる人も有明のやとりすてたる野への朝草
 はしたかのすゝのまのやも音たてゝ又秋風の吹ならしける
 野 分 萩の葉に聞しあはれも打さめて家ゆするまで吹野分かな
 木をもぬくゆふへの野分吹はれてむしひとつなく庭の草むら
 木の間にと聞つゝをれば天の原雲にも秋の聲たてゝけり
 秋 聲 虫の音はよひくたかくなりけり草葉は露にうちみたれつゝ
 はかなゝる身をもちなから露霜のあとの大野に鳴蟲の聲
 蟲 柿はまたうみいろ見せぬ園の内にまふりもやらぬ鈴蟲のこゑ
 おのか名は霜をもまのく松むしの露に鳴音のなとかはるらん
 たてぬきにはた織るむしの聲すなりよさむそまさる秋篠のさと

樹陰蟲 同し名の木かけをおのかたのみても獨かれゆく松むしのこゑ

雁 雪をかみて年經し人もあるものを秋は南に衣かりかね
行かへり誰につかふる臣なれや秋はとるらんへの初かり

雲間雁 越路より出雲路かけてくるかりはこえやわふらん雲の八重垣
久かたの月毛の駒に後れしと雲をかけるかりの一つら

田間雁 月夜をは卯の花にして初かりは秋の田面のほとゝきすかも

雁字 竈門より文字の關路をゆく鴈は唐土ふみの燒のこりかも

雁奴 いさり火によるもますからつかはれて鴈のやつこはかりねたにせず
殘星數點雁横塞

のこる夜のほしはしらめる白草の原くろませて渡るかりかね
長笛一聲人倚樓

よりて吹人のこゝろも高殿に一聲長きよはの笛竹

鹿 小男鹿に戀わすれ草はませなんもみちにもゆるおもひけせとて
小男鹿の角は枯木と見えなからぬれいろになく妻こひの聲

海邊鹿 高砂のをのへの松の下かけにひとり秋しる小男鹿のこゑ
鹿よ身に霜おくゆめは見すとも戀にまほしむ沖の白石

月前鹿 わか影をつまとや思ひまとひけん月に鳴たつ小男鹿の聲
はかなしやゆめ野の鹿の爪えるし世に残しおく霜のふると

霧 ものはふの八十氏川は今も猶あらそひ渡る瀬々の朝きり
朝風にふきなかさるゝ川きりは水の上ゆく水かたとそ見る

秋田 なかたちは霧こそまつれ袖の子は人まらぬまになつるみせり
風さむく吹なすひよりなか／＼に夏にもまさる秋の末なり

秋月 風にこりゆく人の心の中そらにかはらてすめる秋の夜の月
神代より照りふるしたる月なれと見る度ことにつめらしき哉

いつはとはわかぬ流れの天の川たゝ秋をせと月はすみけり
秋の夜の月をさやけみ物そおもふさりとて又くもらましかは

身やおいぬ月やあはれのそひぬらん昔にまさるわか涙かな
さのみやは雲をは月にうらむへき老はなみたの雨もありけり

月はまたよみかへれるを人はよ、老そけゆくそかなしかりける
くさくさの秋のあはれを見る哉た、一色の月にあつめて

八月十五夜

一とせに一夜のかけもや、ふけて月より西の空そすくなき

同じ夜蝕 くまもなく秋の最中にすむ月のわれから蟲の身をはむやなそ

山 月 さしいつる月のひかりは露にしてさひなき太刀のさやの中山

照る日にもそれと見へしか秋の夜の月にはきゆる雪のふしのね

野 月 みまか夜もすみれにいねし春の野を秋は見あかす有明の月

むさし野やいつにもいるも秋夜はをのか尾花の袖のうちの月

貧家月 あれまより露さへうちをうるほして月には富めるわか庵かな

橋 月 行人の跡なきはか、月にして霜とふみ見る天のはし立

船 月 すむ月をなれもあかなく見れつ、ゆとりもとらぬあまの釣舟

さえのめもさやけきま、にたはふれてむやゐの舟のうちも寝ぬ哉

月前琴 月にすむ聲はへたてもなかりけり隣の琴のよはのすか、き

月前笛 古笛をまたおしのこひ吹夜かなあなおもしろき月の高殿

くまもなき月毛のこまにこま笛を誰あやきりを吹たつるらん

月前鳥 子をおもふ鶴は月夜もやみなれや雨にふる巢の露に鳴なり

月前雲 仇とのみ雲をはなとか恨むへき月をもてなす折も有けり

江戸にありし秋月を見て

あはの海あはと見初し夜も更て草にこもれる武藏の、月

嫦娥を もろこしの月の少女も老ぬればわか姨捨に来てやすむらん

小鷹狩 田あらしのぬれきぬきせて狩衣きつるは小鳥かるはかりなり

月下擣衣 月かけとおもひつ、うつ小夜衣一重はおける秋の初霜

海邊擣衣 海人のみか浦風ある、蘆へには波もうつらん鶴の毛衣

征衣曲 詩題 くしも見すおとろ髪さしさす月に衣打つ、人をこそ思へ

秋 夕 なにをかりてなくさみやせんはしたかのす、ろに悲し秋の夕くれ

もみちちる千山の秋の夕くれはそらもあはれのかきりなきいろ

菊 久方の雲井は雲の小夜衣おもきか上の菊のきせわた

一重たもありやもまらぬ古衣きならにいまは八重の白菊

木々はみな酔へるもみちの秋に猶ひとりさめたる白きくの花

とこなつ 露しけき蓬かやふのかたかけに誰ねのこしのとこ夏の花

蕎 麦 牡鹿なく山田のいねはかりはてゝまたそは麥の秋はありけり

栗 玄ふらめやゑみつゝ今は落ぬらん世をうみくりの秋はつるみは

さつ人はきてゆく手にもひらふらん落栗いろの皮の小はかま

松 茸 雨とふる松の下露うしとてやかさをはりつゝたけのほるらん

紅葉 今そひくふもとの里のみ車峯の木の葉もそめまはしけり

夕まくれそめぬ木すゑもなきさはの杜につれなく残る鳥羽

ときは木もまくれにそむと見るはかり蔦のきせたる松のぬれ衣

白波となれこそいはめ立田山錦はきゆくよはの木からし

江都にて海晏寺のもみち見にまかりて寺は鮫洲にあり

さめすとは里の秋こそ名つけゝめ空も紅葉にさかやもひせり

鞍にさし歸るかへ手の一枝はもみちを見つる馬しるしかも

秋動物 秋の田のかりそめふしのまたら猪のゐるとも見へすはたれ霜のよ

きけはまた常のにくけもわすられぬまかにもまさる妻こひの聲

暮 秋 木の葉さへやゝふる衣まつち山また打まぐるころに成けり

忍ふ山まのひてかよふ道もなし木の葉は晴れてふめは聲する

山川に風のなかせる木のは舟ふねくゝ秋もわかれゆくころ

まねけともとまりもあへす秋は今尾花あしけの駒の行末

秋ふけて霜をうけたる鏡草をかれたるつらは見るもくるしき秋

の末に冬立ける朝露まもを見て

見わけんもかた野の秋の末の露なかはゝたちし冬の初霜

冬 歌

初 冬 時雨ゆくみちの野澤の薄氷あやふみもせず冬は來にけり

初まくれふる灰かへてすひつにも火を置そめて冬ひらきせり

時 雨 染のこす梢ありやと足引の足もとゝめぬ山めぐりかな

木のはちる宿もまくれをきゝそわくかはける音はもみち成りけり

都時雨 いつはりのなき世の冬のゑるしにや大内山もまくれそめけり

冬も猶花のみやこは紅にたつ塵中をゆくまくれかな

落葉 ちり初るは、そもみちは山かつの子らかまつかくいろはなりけり

木からの老曾の森は落はして鏡の山の霜も見えけり

山風はよる來て山にかへりけん木のはくつをは庭にのこして

小夜風の吹こしあとを今朝とへは庭に木のはの霜の深履

ひとつつゝおつと見えしか吾庵は木のはの下になりけるかな

たちはなを冬かこひせしを見て

こも枕高くまきてしとこ世もの冬もむかしをまのひねそする

殘蠅 時雨ふりやふれし窓のかみな月あつまるはへの力なの世や

冬鳥 山さとの秋はすゝ鹿の鳴ふらし冬の口とくふくろうの聲

呼かはしかへるからすの尾の上より木のはまぐれて山かせそ吹

冬木して梢はれたる山のはにおのかはまける夕からすかな

いぬかひの湯はわきなから氷りはて狐のわたす海もありけり

冬鹿 あさるへき木のみも今はなかるらん朝霜の上にあとり鳴なり

妻こひのゑひをさますか醒井の氷をねふる冬の小男鹿

つまこひのきつなはなれし冬鹿の又足くゝる峯の白雪

霜かれてやとらんあちのこやもなしあはらになりぬ蘆の八重ふき

寒蘆 所からなにはわかねと枯蘆の風に歌よむ住吉の松

むらさきにさす白灰と見るはかりつはの市場における初霜

聞のうれにはたれ霜ふり深る夜は下にもさゆる斑小ふすま

氷硯 夜をさむみ硯の水のそののみか影さへこほる窓のともし火

山寒月 木のはちり峯のいはほもあらはれて月かけさむし有明の山

冬朝 いもかたく眞柴の音を聞ながら霜の朝たはをきうかりけり

冬日 あつき日のかしこかりしもいつのまに脊に負ふほとになりやしぬらん

冬夜 のこりなく木のは、ちりて大空にまけるは星の林なりけり

月さえて夜深く霜の古ちまた犬の聲さへさむけなりけり

夜 續

まつのめは冬もくるしきおりのへによるもまひはのいとまなき哉

冬 村

霜かれて見と見るかたそあはれなる野かひの牛もやせの山さとはみのゐし野の霜かれをきて見れば蛇草の村にきぬも残らすかりあけしおしねははてにかけなから麥蒔いそく里のまつのを夕霜のふる山はたの村薄ふすゐの外にかる人もなし

水 鳥

水鳥の音羽は霜にかれもせず氷の關のこなたにそゐる

千 鳥

飛鳥風吹かはる夜は水鳥の床もふちせのさためなき哉
波まくら打見るゆめをあはれにも千鳥にさます須磨の浦人

霰

かきすてし鴈のあし手の爪跡にまたふみかふる濱千鳥かな
玉くしけ二服川の小夜千鳥五百津つゝにや鳴わかるらん
夕あさるからすのほろ羽ほろ／＼とほやの小つまに霰ふるなり
枕つくつまやの軒の竹かはら夢もくたけと打あられかな

雪

わらはあそひ手をゑひにせし世はふりてかゝまりながら雪を見る哉
少女子か天の羽衣ぬひかへておとす羽屑や下の初ゆき

火焼鳥みそらにゐるか豆糶の灰とはかりにふれる初ゆき

時ならぬむしの窓うつ音すなりこれも火をけつよはの白雪

夜あけなはふりぬと人やおとろかん月のうつめるよはの白雪

雪の上に松をうつせる月のかけまろきに後のこゝろをそしる

賤かやは雪の上ふきふきかさねなか／＼風ももらぬ頃かな

うさき馬のせたのから橋から歌を雪にはよまんせたのからはし

うさき馬のせたのから橋から歌を雪にはよまんせたのからはし

やきたちのとなみの關の雪の日はそりにのゝてもこえそかねぬる

行末は身をさへ雪のうつむやと心ほそくも経る山路かな

深山へはあまりに雪のふる狐なれたるみちを迷ふ頃かな

雪後訪友 路つけていさやとひてん雪にはといひしものはふまさらめやは

雪 興 にこり酒おしあゆやきて酌かはし晴るゝ千山の雪を見るかな

松 雪 ふす龍のうろこもまろく波たちて庭によこたふ雪の古松

鷹 狩 入相のかねつけの毛も打まめりかへるさをくる野路のたか人
野も山もみな白ぬりになる鈴の音にかくれぬ雪の箸鷹

餌袋にのこるうさきの一かしらうれしけもなく歸る狩人

炭 竈 されたかのかへらん野への草の上にてふに似たる松のともし火
かた／＼をきりやつしつゝ炭やきのすみかされたぬ山のおくかな

爐 火 冬山はさひしとのみそ思ひける炭焼けふりにきほふものを
火も夏にすさめさりしも時なれや冬はすひつを明暮にのみ

水仙花 埋火もなかはゝ花とまらむ夜の残るも春の一夜ありけり
水にすむ山人の名に咲花はこほりの冠波の下うつ

寒 梅 あはれななこかねさかつき持ながら露餘りとも見へぬ花哉
折竹のうちより梅の咲出て雪にかゝまぬふしを見せけり

紙帳をつくりて梅をゑかきて
人の爲め折る初咲のうめの花雪なからにもやらんとそおもふ

紙にゑかく梅は更にもすけなきをぬひてかつけるかさふせき哉
さゆる日に下部の供するを見て

やつこらか腰にさしたる青ひえのひえつゝも身をぬきえさりけり

關路歳暮といふ意を未の年の暮に

引とめんひつしは歳の名のみにてひさつきもせぬ足柄の關
いとまなみ忘れてありし月日にも今日はおとろく年のくれかな

歳のはて ゆつる葉をもちていてたる山かつもかしらの雪はうるかたそなき
あさましや身は老犬のさらほひて春くれはとて嬉れしけもなし
老まさるゆゑをわすれて月も日もとしはとしと思ひけるかな
暮し日は春に入りぬと見えながら明日來る年は今日の年かは
去年よりもまつらんかすのそひぬれはみたまのふゆそかなしかりける
追 儼 家のうちくま／＼までものこさねとやらひかたきは老の鬼かな
鬼は猶やはれなからたつ門にとめんと思ふ年はいにけり

戀 歌

戀 戒 あはれをはえるとはいへと戀路より人の心のまよひそめぬる
男 贈書 玉つさをまつそ傳ふるかりならぬ鴈の羽衣にへにおかなん

女却言 かりならぬ契りとならば鴈のにへとりて後こそ玉章も見め
 寄春戀 あれにけるわか中山の古小田もかへしてねはや衣はるさめ
 寄夏戀 あふとはともしの名さへうきものをめをあはさぬといふかかなしき
 寄秋戀 すかた野の尾花末なるいもか髪ほのかに見てもなくさみやせん
 寄冬戀 こふしもて打はかりふる雪の夜も戀のやつこはこりす行なり
 遠戀 あふとは片雲走る夕くれの空はるかにもうとき君かも
 別戀 曉にわかれしいもかかたみとや櫛かたのこすあり明の月
 戀 涙 いく尺の鯉や生ふらんあなうしのひつめにあまる我涙かな
 無回音戀 灰をさへ見せつることもあるものを思ひもえとや返したにせず
 寄名所戀 あひ見ねはうらみのみちそかさならめ幾重葛布を掛川の里
 寄簾戀 玉たれのをすのはつれに見てしより打たれてのみ物をこそおもへ
 寄箏戀 人といふ文字をはあまたおりつれと獨我ぬるあしろ小ふすま
 寄答答戀 あふとはあらいそのあまのいなかたみつみぬるものは浮ふ成けり
 寄箎羅戀 あはれわがこふるとまらば麥すくひゆかけてこそよ人めまのひて

寄轡戀 吾戀はあれしうまやのさひくつわおもひかけてもなる時そなき
 寄樽戀 引板のくれ過て夜もふけぬれとふしにくしとやせこか來ぬかも
 寄篋戀 わか戀は竹のわれひをまくなはのもらさしとのみ思ひこそすれ
 寄獸戀 こうくゝとねにはなけともいつかきつねもせてつひに人はかるなり
 寄楚割戀 こひにわかむねさへさけのすはやりのやるかたもなきおもひをそする
 寄瓜戀 いもか手をいつかはとりてまくは瓜ほそちていねん時のなきかな
 寄蜜柑戀 たれにかはむきてかたらん大かうし思ひつゝみてまろねをそする
 寄海苔戀 あふとはいその岩間のかたのりやかたくもひとりおもひつきつゝ
 寄牡蠣戀 打あけてかきもやはや我思ひつゝみはつへぎものならなくに
 山婦怨詩題下同
 船木きり足から山に年ふれは家なるいもかこかれもそする

漁婦怨 かへることまらす松浦のいさなとりやとはれやりしりとそくやしき
 征婦怨 さきもりのつまはまらてや待ぬらん伊達府にさらす雪の白骨
 卷耳の詩意を

つみつゝも人を思へはみちかたみおくもよめなの道中そかし
凱風の詩意を

山はたの老たるいもはあまた子を持つゝよそにはひやみもせず
老女戀を つくも髪ゆふかひもなくなりぬれとおもひは猶もゆたの玉すち
竹取の中納言まろたりを

行旅歌

送 別 のりてゆくうひたひ馬にかれひけをかけてそ祈るさきくあれよと
けふのれは石佛こそうらやまし別るちまたに忍みつゝそたつ
春 旅 くゝり染ゆはた衣をきつらねて物まうてする春のひな人
夏 旅 かり枕みしかき夜はも旅なれやふしそわひぬるあしのやの里
秋 旅 友ならぬ松さへ見えぬ夕霧にゑる人やたれ高砂の里
冬 旅 旅衣かりきぬれともふみも見す秋風さむしあまのはし立
いとはやもそりのはやをゝつけてけり越のねわたしふゝきつよさに

旅 山 くれぬまに越こそはてめとねたちかはたこやとらんさやの中山
旅 川 故郷にふみまき川のなかれゆかは涙をそへてかきもやりなん
旅 橋 聲たてゝわれもなきなんうき旅に渡るや何のかひの猿はし
旅 夢 久かたのあめのあなたの故郷もぬれはや夢のやすく見せける
旅 泊 日 舟人とともにろいろになりにけり黒牛湯に日數へぬれは
東路の大井川にて

はなをさす小牛にまさる大る川かるもかきつゝ渡るかち人
富士山の歌あまたよみけるうちに

高さゝへすかたさへまた所さへふしは世になき山にさりける
膝をめくるの山は雲の孫なれやいたく老ぬる雪のふしの峯
天かけるからすうさきも行すりに跡つくはかりふしの白ゆき
鳴澤の夏の氷を夏として神代の雪の残るふしの嶺
ふしの雪の下草もたにわれは見し立もおよはぬ足柄の松
露をたにおもけにたてるむさし野の尾花の末にかゝる富士のね

備後の神の橋を渡りて

山鳥の尾のなか夜にや作りけん渡しはてたる神の岩橋

周防の錦帯橋にて

たなはたの日に七かへりおれるその錦の帯かこれのうきはし
赤間關阿彌陀寺にて豊臣太閤の平家を弔ひてよみたまへりし歌に波の花
ちりにし跡をとへは昔なからにぬるゝ袖かなとあるを見侍て

とはれしもとひしも共に散はてゝ跡をら波の花の行末
同しところの遊女を

とへはもと天津少女の花かつら波かくまでもおちふれにけり
隣の舟にて遊女かさみせにてふものをならすを聞けはいとあはれにて白
樂天か潯陽にて琵琶を聞江州司馬青衿濕といへりしをおもひあはせて
むかしいまみつよつの緒はとなれとひとつ波路にぬるゝ袖かな

雑歌

さうのおもひ

蝦の目をかるともかつきて大かたはくらけなからに世を渡るらん
さやはなと人の心のつくり太刀みのなき世とはなりきたるらん
富草の花つむ人はくるしとも思はてやふる世のつゝらをり
山水のいはまほしくと思ふより人のあなくなる人もありけり
草の實を珠なりとよくいひなして人にきすすく口も有けり
三尺にもあまるさきらそおそろしき鶯も鳥といひもよこせは
ぬは玉のいもゝ黒髪つかねわひたゝおしまけの世にこそありけれ
垣ほさす人の横言はまげくともとなりのことく聞過さまし

古をおもふ

大御馬いてし昔やいかならんみくさかりつめむかふくに
御はかせのさやの中山なか／＼にむかしの道のまのはれをする
みとらしの弓矢の道のくたり來てたゝものゝふのわさとなりにき
亂世を思ふ

附

おほ君の國ぬすむとも白波のたちこえし世は末の松山
錄 唐桃集

民をおほふ大み衣のかたまよひまよはせし世のうらめしきかな
海山もをしとりさわき劍羽の打あひし世は聞さへそうき

野史をよみて

わきもこかかほつくりせぬ朝寝かみみたれたる世のふみは見にくし
大御垣たゝさねのみになりし世のふみあけ見るもかなしけり
艶書合なといふものを見ておもへらく

あたし世となるもうへなり大宮を戀のちまたのふみのかよひち
君を思ふ 淡路島あはれといはぬ日もあらし豊住の江の君わすれ草

おもふかな君のこなかきかきて煮るかなへの足のつよかれとのみ
すはへする小さくか原の末の露かすならぬ身も君をこそおもへ
思ふこといはてやまんもかたかしきかしのいひのいひもはてはや
よしや人に蜂ふかるともさしいてゝいふこといはんわか君のため
身の老たるをおもひて

老てわか身のゆく末はしら川や心のみつわくましとおもへと

世の事を今も荷として牛のくゐさすか老てもよわりやはする
老の身はうらふれ衣波よりてあらひはるにもかひなかりけり
ひゝらける身のすゑものそあはれなるはなれんほと近しと思へは
はかなしやわか百年の後にたれ昔の人のかすにかそへん

少時の事をおもひ出て

鳩の枝つきつゝまのふまのためて雀の小弓いにし昔を

いまは世をへたつるかことさゆる夜も太刀垣くみて習ひしことは
すゝむへきみかはとおもへと八橋のやつれてのみも世を渡るかな

述 懐

あけて見ん人なくは世にありながら身は須々保利のおもしなるらん
ほねをさへこかねにかへし世もあるをひく人もなき牧のはや駒
春の田のすきさしすまふ牛の尻うてともゆかぬ世にもあるかな
さゝふ原かりもらされしかたうつらひらみてなりと世を過さはや
山にさるとはみないへとあしたみつ暮よつこのみつなかれてのみ
雲鳥のあやに心なまとはせそうつら衣も野にはふさはし

人
君
臣
文武士を

ひく人のなきもうらみし昔より牛の衣のうしとなく世に
純黄こそおもてにすへきいろなるに縁につくはうらめしの世や
わか身こそ八花咲の古鏡やつれつゝ世に稜はありけり
のひすとも何さまたけのあるへきやわか身名なしのおよひとおもへは
片腕のそこまてすみてあるものを世にとりあくる人のなきかな
かり置て田のきにたてるさゝくろめくろめてのみや世を渡るへき
龍をはふる手を持たなから殿居して鼠おひつゝおゆもありけり
あわふきてくるしむ蟹はわれなれや口なしいろを身にはもちつゝ
いとほしなわか君をこそこひなます身はおろされてほそくなるとも
陰くらき柳の水門のもろこはえはえある春にいつかあふらん
あたら世にうまれいてゝも裸虫人らしけなき人もありけり
昔よりかしこき君はをみなへしへしてその世の花は増けり
わか身かは君にいたせる美濃のくに關のふち川ふちもありつゝ
むかし人えみす衣を身にきつゝはらわたに織る大和錦を

翁
皇
舊
鎌
江
古
畝
八
高

都
都
都
倉
山
壘
幡
津

よたりかけ又かくはかり老にけりよゝと涕のいてぬまそなき
鶴脛を朝日にのへてゐねふれは千よもいきなん心地こそすれ
黍つくる人のみやこをよ所に見てたひらは千代もかはらさり鬼
なにはつはふるきみやこと見へぬかなかまとのけふりたち増りつゝ
みけむかふこかめの宮も露けくてひとり臥猪のおのかとこ宮
さゝ波やあれに後の飛鳥川それもふちせのかはらさらめや
山櫻それさへ志賀はあれにけりすこかつむ菜の春の花園
いさをしも山と高くて罪もまた海あさからぬかまくらのさと
みたれたる世の草刈りしかまくらの里は更にもあれまさりけり
江のなかれ山のそひえは昔にてぬしはいく度あとのゑら波
朝寝髪かきあけ城の跡えてもみたれたる世のすかたをそしる
菅たゝみいやさやまきし敷島のなかき根さしをあふけ國人
あたふせく八はたの神は玉鉾のふみの道をもひらき初けり
宮に雨もりてこそたて國民のかまとの烟世をおほふまで

菟道太子 もろともにとりし蕨のそれよりもあはれ枯れつるうちの山松
 王 仁 この花をさかせしのみか難波津のことはの花もかそいろはなり
 厩戸皇子 うまや戸にひかれし馬は蘆草のふるき道をはふみあらしけり
 後白川院 をしき哉もとの流のかはりきていつか返らんしら川の水
 源頼朝 世に龍となりかはりてやいつの島よるへもなみの蛭のなかれ子
 天津日のひかりをかりてかまくらの星月夜とはなしにける哉
 源義經 墨染のくらまの子牛引かへておやのあたうつ虎のいきほひ
 えそに身をおきくるみけり山からのみつからなせるつみもあればか
 平賀義信 名に高きむちさしのみかむさし野の民草ひろくなひく春風
 後醍醐帝 招き得てかへせしものを玉くしけふたゝひ落る日のをしきかな
 新田義貞 鯨ともなるいろくすを手はなちて吞れしは惜しあまのうき舟
 藤原藤房 いとはやもきを見てたつの駒の足いさめすてゝそ雲に入りぬる
 足利氏 あしかゝと名にはたてともつひにその國のあゆみのなやましの世や
 今川義元 あさましやあさあうみをの桶はさまあさくも人をおもひよりけり

織田信長 あめ□□□□□□□身もかはら屋のよはのけふりの一むせひとは
 豊臣太閤 天か下ちゝにわれたる古瓦ふきあはせしは君ならてたそ
 なにはかたあしの根さしをあさければみしかゝるへき世とはしらるれ
 同秀頼 あめか下もちふりしにもあらねともすてわひぬらし難波菅笠
 關原にて すきまなく世はをさまりぬ不破のせき板ひさしくもあれし世の中
 吾妻より照れるひかりの出ぬれは見ぬもろこしの鳥そなくなる
 紀貫之 水にすむかはつも歌をよむと見し君か目高き大和ことのは
 源俊頼 和歌のうらに年波よりし老あまはかつきのこせる玉藻やは有
 和泉式部 うまれいつる世もあらはまたこやの池あやめつらしき影もいてなん
 紫式部 このはの花はかりかは紫のはひさへ人にさゝれさりけり
 藤原家隆 島にます君をしたへる言のはを今見る袖も波はかけけり
 頼阿 よしといへと吉野へはゆかて足利のあしへにあさる和歌の老鶴
 長嘯子 空蟬のからめけれとも夏衣薄き世に似ぬ大和うた人
 契沖 君こそはあらひ初けれ古衣きならの言のふるきよこれを

長流 聞くやたれ世は耳なしの山川になかくなかるゝ鶯の聲
赤穂義士 霜をはらひかたきこほりをきらまくとよ深くたゝくをしの劍羽
とりあへすぬさともなして手向けん袖も紅葉に染む赤穂人

天野屋利兵衛

よき衣もきぬなには江のあし中にかゝるふしをも見するあき人
惺窩先生の影像に
戀の山たふれて久しくにの道かきをこせしは君ならてたそ

戦國を 人のくにうはへる城のかす聞けはぬすむとなりの鳥はものかは
夷賊 むくりこくり海とゝろかし來しかすもつくしの沖のいくりとそなる
秋つ洲もにすむ虫の音をなきてわれから寇を引人やある

白波のよすともいかて引とらん神のまもれる大和たましひ

草賊 みたれたる世はゆきなやむ陸奥の草の中にもしのふもちすり

鳥銃を 鳥津鳥うたまくほしもためらひて持つゝしはしひきそかねける

山家 さかふきにふけるかや屋の末たれて雪をも世をもすへらかしけり

山住のむねをせたむるものとは庵吹あらす風にさりける

世のとはおもひすてたる柴の戸に朝夕なにをいかるかの鳥
入るをはかりいたすを常に山住の軒はの雲はあまり有けり

田家 つはくらのはいりの戸のみ明おきて妻子もいつるしつか麥秋
火の種はとなりよりこそ借てくれ山田かへりの里のしつの女

松の火のまつともなしに近隣よるはよりあひてなはをこそなへ
くらき夜もいもかあみすく燈火をめさして歸るあまの釣舟

閑居 いてそこねとはしら波のゆふ月のみ船もすゝけ歸るあま
わか身にも猶待ものゝたえぬ哉花ちればまた山ほとゝきす

幽居難逢 かふ鶴のひたひの朱も年ふりて深くなりゆく老のかくれ家
古瓦かたかけ硯する墨のすみこほれては世にもいてぬる

野逕 かけわたす古船板の針目よりすゝき生いつる野ちの淺溝
ぬは玉のくろ龜のなく聲ふけて人もかよはぬ小野の古道

遊女 千斤のかないかりよりうかれめかうかれてとむる沖つ大ふね

歌 妓 かひになく猿よりもなかに一聲に九廻の人のはらわた

蟬聲にうたふもはかな秋風のふかはいつちに身をやひくらし

狐化美人 まねくとも人なまよひそ花薄ますほのいろをかりのよ狐

狸化老僧 夕しくれ古塚あなの老たぬき誰跡とひてすみそめの袖

從軍行詩題 弓杖ふりみやこいて羽の鳥の海さはへなすあたをいころさんとて

塞下曲同 ふる雪にたてつきなへてもり明かすよろひの袖もつらゝるにけり

青黄赤白黒

あをきつなきつねつらんとあかみ山雪ふみわくる熊のむかはき

木火土金水

青柳のけふる堤に舟よせてつり針たるゝ春の川水

公子の一彈に六の鴈を得たまひしを

いねはむをむつかりいひし田主ひと打よろこはん君かみ狩を

雞毛筆といふを長崎人の得させければ

庭つ鳥かひやすけなる筆なれとからとしきけはかけろとそおもふ

はかきを人に借てかへすとて

去年の秋かり田の鳴の百羽かき春きていまそかき返しぬる

鮫をひさく人にかへすとてたはふれに

さめやすきかすゆさけたにかひ得すてつかのまさへもさひしかりける

人のおこせし酒のすえて醴雞を生ければ

目をふれはすくめとなれと生ひしその鳥にはさかもありとこそ見れ

黒き馬の子をかひて杏坪の田をあゆませけるに昔顯輔朝臣の馬の子を牛の子と名つけられしを思ひ出て放牛桃林の故事も侍れば

牛の子とわれもよひてんから桃の林になれてあそふ黒こま

哀 傷 歌

甲辰の春首あけてたゝひとり涙の玉手箱ふた親のなき春にあふ身は

親のおもひ日に酒をそなふとて

たらちねに今日毎みきを供ふ哉かたみに残る枝もふりつゝ

兄なる人の追悼に歸鴈を

をくるゝは夕雲の端にのこれともいつれきえゆくかりのつら
妻をうしなひし頃月を見て

仁保鳥のふたりならひて見し月におもかけはかりうかふよは哉
宮田正賛か葬を送る道すからよみける

まねけともかへらぬ野へを送りゆく袖にとまるは露の白玉
なき玉の行方をとへは心から新星わたる鵲のはし
かゝる人なそやと空にとへはたゝ袖にこたふる天の川波

正賛の一週忌

苔の下にうつむたまきの一めぐりおもひまはせは惜き人かな
野上守樹か一週忌に

乘ていにしそのなき人をわすれめやひつき車のけふめぐりきて
某十三回忌追悼寄鳥懷舊

屋形尾のかすにも年のめぐりきて更に昔をしのふ山麿

夏哀傷 九節のあやめは引てありなから人しなればねそなかれける

菅晋帥か墓をとふらひて

ふるつかを問ひくれば日の夕かほの花うこかして秋風そふく

神 祇 歌

神 祇 ねきことを木のはしくれのふりたてゝきけ小男鹿の耳もりの神
貞観の節婦榎本福佐賣か社をたつねて

ひはたふきふくさめの宮おればてゝ時雨の外にもる人はなし
こくふの白神社にまうてゝ

しらかみと身も老ぬれと君を祈る心はもとのあけのたまかき
豊田郡樂音寺にふるき神名帳のありけるを

秋の田のはくとも見ゆる古紙をかりてこそしれ國津神の名
藤井正端が園に歌聖を祭るを

里の海士のさぬきもまたす此神を早くも祭る安藝の歌人

祝 賀 歌

世を祝ふ はなれ髪ゆふ少女子か朝かゝみくもりなかれと世をいはふなり

寄書祝 からは灰となせと瑞穂の國つふみやかてさかふる日のもとの道
 寄月祝 老せしのくすりを月の玉兔つくともつきぬいく千代の秋
 寄船祝 あら玉の千とせをのふるみ船うた聲を帆にあけて君を社いはへ
 若槻翁をほかひて

たちゐさへかるの社のいはひつき若かへりつゝ千世もませきみ
 菅晋帥によみて聞ふ

七十にまたなつこのさやかかけて老さひぬ身にはたちも及はし
 松田義周か年いはひに時鳥

千とせをはたちこせ山の時鳥あまたにやらぬ初音なりけり
 梨をくらふとて

儒教歌

道 人のゆく道しきかすは世をうしと耳洗ふにも引かへるらむ
 五常 十のねふりみなめやさめすも人はたゝ五つの常をわするなよゆめ

人性本善 すゝき見よきたなきみその深芹もいかて白根のくろみはつへき
 人性本善而氣有澄濁といふ意を

影やとす月には咎そなかりけるくもるは池のみさひなりけり
 人性善而私欲害之といふ意を

にこりなき心の水のゆく庭におもひのくまの苔そしからむ
 仁義禮智本是一徳といふこゝろを

四ひらとは咲てこそ見ゆれもとはたゝ人の心のあちさるのはな
 大學 わけ入らん道のしるしの門なれやあくればそれと三輪の神杉

中庸 皆人のかよひなからもしらぬ哉いつもかはらぬ布留の中道
 相坂の關の松村すきもせず及はぬともなき道そみち

異端 ふみたかふ跡は千里の濱千鳥たゝ一あしのおしへよりして
 浮いてんとこそかたしあやまりてことなるみちにないりその淵

近世の異學を
 唐錦世にふるき名をかるの市うるやまことはおのか手作り

契沖の歌に

くしの家しひておこすとさゝへつゝ人こそたふせ風はたふさす
返　　し　くしの家人さゝへすはこと山の横あらしにや吹たふれなん
又契沖か歌に

くしの家守れる犬はわれしらぬ佛を見てはほゆるなりけり
返　　し　くしの家守れる犬の主知れば佛あやしとほゆもうへなり
又契沖か程子朱子を罵て宋の偏儒なとゝいひ又五雜俎を引て宋朝は理學
をもて夷にはろほされしといへりかの書にいへるも六朝は盤樂もてほろ
ひたりこは怪むに足らず東漢は節義の士あり宋は理學の儒ありしもつひ
に亡ひたるは氣運の盡なるをいへるなり孔孟ありても用ひられされは周
もほろひたると同じかれ正學をにくむひか心より口をきはめて程朱を罵
るはいかにそや

ひかみたるわか心よりいひいてゝのるやあさまし猿澤の池

明の太祖は程朱の學を信し蒙古をほろほし中國を取かへされ東照宮は舟

橋家の議を用ひたまはす四書集註を信し惺窩をたつとひ道春をあけもち
ひて天下太平を助け成し給ひしは契沖いかにおもへるや

ふみ見ねはあるかひもなしもちふれは世の人わたすまゝの繼橋
爲家卿の歌に^へうたてなと大和にはあらぬからふみの跡をまなはぬ身と
なりにけんともよみたまへるに西土の聖賢をのりてからふみよませぬ大
和博士のあるはいかにそやとおもひて

うたてなとからふみ見なとをしへけん見ぬこそひくき大和小博士
又たはふれに

からみをはなとまゐらすやにしひかしあへてこそよけれやまとうま人
得正面斃といへるこゝろを

あめつちの父母なせるこの道の真なかにわれは野たり死にせん
玉ほこや身もおこなひもきすなくてきえんとそ思ふ露の道芝

履歴類

府學師員に補せられける時に

山鳥のをろの極尾のをさなくて國のかゝみにかゝるはつかし
あら鷹のつかみ餌おもふたくひ哉山出のわれのつかへなれねは
後にあかたのこと承りて三次惠蘇等四つの郡見めくるに父老百餘人つと
へて酒を飲ましめいさゝか養老の禮にならふ時は彌生なりければ

民の訟を聽て
かしらにも花をさかせて酌かはす老のかすさへもゝのさかつき
民草にめくみの露はかけもせてひゆるしもとをおくか悲しき

水の訟を聽て

田長らは心のみさひいひ出しもわれにまかせてすめる池水
窮民をあはれむ歌のうち

あはれそのいひうえしたる民草のむなしきはらに牛も鳴めり
わひ人は軒もる雨のふる衣ひさのかはらもおほひかねつゝ
あかたに月を見て

人のしる里にあらねはかなしさもわか身ひとつの秋夜の月

年經るまゝうたへもすくれくなりければ

しけかりしその串刺のうたへさへまとはになりてゆつるあせ道
惠蘇郡高の山といへる僻邑に二穗のいねおほく生出けるうちを取て箱に
いたたてまつりける箱のふたに

わか君のめくみの露の玉くしけ二穗のいねもこゝら生ひ幾
食邑を賜はりける春のはしめに

いはひつる野老を得たる春なれば外にほるへき物なかりけり
馬酔谷といふにも鐵を吹せければ

此山のあせみの花はにかゝらすまかねをふけと酔ひもせぬかな
年老ぬればあかたの事をかへさんとおもひて
鳥をたもさきえすわれは老さひて牛の刀のつかひかたなや

附 錄

和歌は父の好める道なれはおのれわかき時よりたえて歌よまぬにもあら
さめれと力を用ふるまもなくして打過しを年老ておもひおこしぬれとよは

ひかたふき心もほけまさりぬれはなとはか／＼しくよみいつへきやと打
なけきて

ことのはのみちまなふとも六十過ぎよむま短き三十一文字
いてたちし下照る道のをそければ木の下やみに迷ひてそをる
わかのうらにみをひきの舟なきわれはたつ／＼しくも蘆へをそゆく
おのれ唐歌をすかり和歌をよむはいかにと人のいひこしければ

かたをとりからとなきては山鳥やまとうたをも諸聲にこそ
とよみて聞えければ、おのか名もわすれ大和に咲たねは心まとへるから
桃の花とよみておこしけるかへし

おのか名もしりてやまとに咲ぬるはうみ渡りたるから桃の花
又ある人より

から桃もいかにや今は大和柿なりふりかはることのはの道
返 し から桃もならねはつひにやまと柿それもへたにてやかて落らん
おのれかうたはからくさしと人のいふと聞て

焼く蕎のからくさくともよしや實は世に一かとのなからましかは
からうたも人の上にたちかたく大和歌は更にいふかひなければ

から歌もかけの口とはなりもせて大和ことひの牛のしりくさ
おのれいたく老ぬれはよみたる歌のうちをかきあつめおくその末に

敷島の道の蓬と人や見んこゝろあさきもすくなるものを
とてもよき名はいてしてとて亂るへきわかしきしまの道のかるかや
ひきかへす筆の力もなかりけり牛屋の岡のくたりゆく世を
翁さひわれをはゆるせ春くれてけふはかりなる鶯の歌

のこすとも世の人の見ぬものは、我よみつと、なすへかりける

物名

子丑寅卯辰巳

ねくもうし神もうけとらうかるらんおもひたことも身におはぬと

午未申酉戌亥

うまく思へひつしに物はあらさるもあなとりいぬとつとめゐる妻と

かきのみそうつ

赤きそのみつかきのみそうつもれす雪にたつたの杜のみやしろ

むなきのかはやき

年ふれはほろくおちぬわか庵のくろ木むな木の皮やきれけん

俳諧歌

高雄にて夜水の聲を聞て

山姫のしと聞てもきよ瀧の音の高雄に戀さめもせず

春月 桂男も春はかはつに目やかしぬ天の川原をねふりつゆく

羊躑躅 ひさつきのひつしつしそ咲にける猿なめりより時を早めて

木 横 夕かけて咲朝かははむくけにて犬朝かほといまはよはなん

西行の賛 野ら猫となりし身も猶つなかるその頸玉の歌の小ふくろ

人のおこせたるかつほふしのひとつたらぬといふを聞て

一ふしはねこしひきけんおほつかな九ふしとはあやめつらなる

老をなけなきる歌のうちに

見しともしりくゝらさるさしなれやせにもはらにもとまらさりけり

いつのまに老山鳥となりぬらん鏡を見ればなくはかりなり

耳いとく聾ける時鳴神のなりしを

蟻を牛と聞つる耳もあるものを神も蚊ほとになりけるかな

人のもとめにて絹へものかきてやるとて

我筆のからすをなせしから絹はたふさきにたもならぬ惜さよ

おのれの歌のわろきを

からうしてうめきいたせるしりひ歌へにたもならは人やきかなん

小長歌一首

閑居雜興

いその上ふる山かけに、いほりさし心にかなふすまゐかな、つは

くら來れは春もくれ、ひくらし鳴て、秋をしる、琴もひきさし、塵つ

もり、ふみもよまねは、しみも生ふ、たゝ事なきを、身のさちと、おも

へはたのし、柴のあみ戸も、

右一首十七句首尾はつねの長歌にて中の八句むかへ詞に作

りてかの唐歌の五七言律詩にひそかに比するものならし

長歌一首

擬護良親王獄裡述怨歌反歌二首

久かたの天の御潢のわかれ水にこりなき身のいかなれば波のぬれ衣いく重きてほさまくよしもあらかねのつちの人屋にこめられてとこやみのとぬは玉のよるひるわかすかまくらの星月夜さへ見えもせずけに日にとほきたくひとやと言問ふものはおころもちつちもちきつゝかはほりもつちほりきつゝあな傳ひうたへいてよといひかほにすれともそれもかたいとのたゝ一すちに身の罪のなきとをのみさゝかにのいかきにかきて雲井まであけんとすれと守宮らか手にとゝむればあちきなやおもへは昔から人かえみしの穴にとめられて雪をかみつゝ天飛ふや雁の羽衣はるくゝとあしにつけたる玉つさのみやこにゆきしためしさへありそのいくくり返り思ひすてゝも思ふそのあはれ

ひと度雲霧の晴れて都にかへりなんことたにあらは空蟬の世のあた人をつるき太刀いきりはふらしあめか下もとつ大和にかへしてんあふけは高きたかみくら雲の絹笠はりかへてさせまくほしとおもふのみまろははかなきまろ小菅たゝねもころにつかへんとねかへと誰にいはまゆく蟹の爪たき石の床苔むす上にしつくおちかたしく袖をしほりつゝねをなくとてもいかてかは雲井にそれと聞ゆへきたゝ聞ものは蜩なり耳はありとも物いはすはひかゝまりてかく文字はよみもとかれす問へはたゝ口なし色のつちくれをはみつゝともにはてなんとするこそ悲し大君のおほしたちにし大御わさいくほともなくくつれなんかの廣原にもゆる火のうちてなかゝさかりなるあたらいさをも波のあわきえておもへはこれにてそなかきうらみの残らさらめや

反歌

罪もなき亡魂をさへ埋むらんあなあはれとも誰か問ふべき

ほねを筆血を墨としてかきのこす硯の海は心なりけり

食祿箴

凡食君祿、孰不奉公。奉公有道、可不豫通。及其未仕、必入學宮。愚而善讀、猶啓其蒙。智而力學、乃爲豪雄。故智與愚、道藝惟攻。考聖賢法、尋古昔蹤。修己治人、其方不費。持此出仕、當物發胸。我有權度、依理折衷。過則速改、遂之益誼。克綜細務、如萬縷繆。克決大事、如千鈞弓。不綜則亂、不決則壅。無知不言、無慮不窮。言由於己、不必人從。議出於人、平心能容。毋或乖戾、毋或雷同。摸稜是拙、調停非工。正己格物、責人省躬。無妬人善、無矜己功。勿慢爲簡、勿黨爲聰。務舉良善、函黜奸兇。仰輔仁政、俯厲頹風。見諛如瞽、聞讒如聾。無偏無黨、有始有終。不惜爾爵、唯憂是邦。以是從事、是之謂忠。一有不盡、事君非恭。進退有命、窮達所逢。質諸天翁、吁彼行險。微幸登庸、匪直曠職。或招之凶、又食舊德。自安狂恣、皆負其國。且辱爾宗、今作此箴。庶警彼矇、言原聖訓。省之崇之。

文政甲申年○七 夏日、杏翁、

和解

およそ君の祿を食むものは孰か奉公せざらんや、されど眞の奉公せんと思ふ人は奉公にたゞしき道あり、其道豫通達せざるべけんや、まづ其身いまだつかへざる時に及んで、必學宮に入りても、のまなびすべし、愚なる人にも心を專にして善く書を読むならば、其蒙昧を啓て智も出で來ぬべし、又うまれつき智ある人にて力學びなば、すなはち世にすぐれたる豪雄ともなりぬべし、故に智者と愚者とみな道藝惟攻みがきて、聖賢成就の法則を考へあきらめ、古人のふみおこなひし蹤跡を尋もとめて己の身を修るより、人を治るの方に至るまで、普からぬやうに覺悟すべし、これを待て、出て仕へ、其役々のつかさどれる萬事に當りて、わが胸の、たくはへを發き、これに應ずべし、我に權度のたがはぬものあれば、それを以て、事物の輕重長短を、はかり、たくらべ、道理の眞ながと、おぼしきを見定、判斷する、これを折衷といふなり、若過てるとあらば、速に改むべし、それを途なば、其事ますく、証て、害深かるべし、負をおしみて、非をかざる、其病小ならず、ふかく戒むべし、すべて政事に、大小の分あれど、細務なりとて侮るべからず、文書をも、こまかに見分け、其筋くを綜

はからふ、たとへば萬縷の縷をおさむるが如くすべし、又大事なりとて、恐れ憚るべからず、其事の邪正當非を明にわきまへ、大に勇て決斷すべし、譬へば千鈞の弓を放つが如くすべし、細務をゆるかせにすれば、其事亂て治まらず、故に書に克勤小物と見えたり、大事を決せされば、其事壅滯て人のくるしみ國の害大かたならず、故に政事は、優柔不斷を、にくみて、果敢決斷を、たつとべし、よて論語に、由也、果於從政、何有とものたまへり、凡何にても、上の爲と、心つきたるとは、必申べし、知て言ざるとなかるべし、取る取ざるは、上にあり、又何にても、上の爲にはかるとあらば、必深く、かうかゆべし、慮て窮さるとなかるべし、知ていはず、慮て精しからぬ、皆不忠なり、さて、言の我より、いひ出せるは、人の從ふを必とすべからず、其事善とも人取らざれば、しゆべからず、まして、我言のいたらぬもありぬべし、また議論の人より出たるは、己が心を平かにして、能これ容べし、人の善を取れば、人もまた告をたのしみて、其善彌廣し、すべて人と乖戾して、そむき、もとることなけれ、また人と雷同して、みだりてあはせるともすまじきなり、言の善には、したがひ、わるきには、つくべから

す、又判断者となりては、速に裁決すべきを、事の兩端を持ってがたをつけぬ、これを模稜といふ、唐の蘇味道が故事なり、是は甚拙きわざなり、又邪正は明に引わくべきを、邪人のいたみを、あはれみて、其間を、やはらげ、ととのへて、善惡ともに用ゆるを、調停といふ、宋の元祐の故事なり、此しかた工なるに似て、工にあらず、邪正わからざれば、士氣振はずして、國脈したがつて衰ふ、されど我身正しからざれば、人を正し難し、故にまづ己を正して、後に物の不正を格し、人を責には、まづ我身を省るべし、凡人に善あるをば、いさゝか妬むと無く、われにある如く悦ぶべし、己が功あるとは、すこしも矜るとなく、われに、なき如く忘るべし、凡事の簡易にして、わづらはしからぬは、よき事なれども、勤むべきことを慢おこたりて、それを以て、簡とすることなかれ、慢と簡とは、相似て同しからず、又聰明にして、よく事を察するは、よきことなれども、人の隱事など、訾もとめて、それを以て、聰となすとなかれ、訾と聰と相似て、大に異なり、務て良善のうま人を舉げ、亟に奸兇のかたましき人を黜くべし、善人はあげかたし、故につとめて舉べし、奸人は、しりそけ難し、故に、すみやかに黜くべきな

り、仰ては君のありかたき仁政を輔奉りて、推廣め、俯しては、下のくづれたる頽風を勵して引立べし、己に諛ふものを見ては、瞽の如く、見てもうれしと思はず、人を譏るるを聞ては、聾のごとく聞ても、それにまとはす、斯己の心正しく、其道偏黨のかたひすみなく、其儘つねにして、初終かはるとなく、己の爵位を惜ますして、惟是邦の事を憂ふべし、凡此數條の事、身に行ひ、心に得て、君につかへ、其役に従事して、力を盡す、是を忠とはいふはなり、忠とは中の心と、かきて、己の心底をつくすの義なり、されば一も盡さゝると有ては、忠とはいひがたし、其盡さゝる心を以て、奉公しては、上を侮るを免れず、故に君に事て、恭に非ず、進退榮辱は、天命にまかす、窮達利害は、いで遭ところのまゝにして、心をなやますことなく、人の己を知るとを求めずして、其心行の善惡は、これを天翁に質て、その照鑑を、かうふり、心にはづべきとなくば、靜に時を待べし、吁かの小人險を行ひ、幸を徹て、世に登庸ひらるゝも、あるべけれど、それ等の輩は、出て爲となく、直其職を曠くするのみならず、或は事をあやまりて、國の凶咎を招き、其身終りを、よくせざるも、少からず、又いたづらに、先祖舊徳の厚祿を食て、

身を勤勞を、はかりみづから、狂悖ともくるはしう、おろかなるにやすんじ、放縱に暮せるも、またありぬべし、此ふたつ同しからずと、いへども、皆國に負き、且その家の祖宗を辱むともいふべし、惜むべきとならずや、故に今此箴を作りて、おのれか家の子供をはじめ、彼膝き輩を警んとを庶ふなり、すべて此箴の言は、これ聖人の訓戒に原つきて、一言自己の作意を用ひざれば、常にこれを省み崇びて、凡食祿の家、各才徳を成して、國家の用に備らんとをねがふのみ、

此和解をもて引おはせば箴の本文よむとを得べきなり、春草堂

諭俗要言

爲吾民者、父義、母慈、兄友、弟恭、子孝、夫婦有恩、男女有別、子弟有學、鄉閭有禮、貧窮患難、親戚相救、昏姻死喪、鄰保相助、無惰農業、無學賭博、無好爭訟、無以惡陵善、無以富吞貧、行者讓路、耕者讓畔、斑白者不負戴於道路、則爲禮義之俗矣、

和解

吾支配する所の民百姓たる者は父は義理を専として能其家内を正し母は慈悲の心深して能く其下を養ひ兄は友愛にして能其弟を憐み弟は恭敬にして能其兄を尊び子は孝にして能其父母につかふまつり極て親の心を樂しめ夫婦は互に恩義を忘れずとも世渡りを營むべし去るべき道もなくて妻を出し守るべき節を失ふて夫の家を出る皆恩義を忘れたるなるべし都て男女の際夫婦之別明にして聊猥なると有べからず年若き者は暇ある時物知る人に近き道理をわきまへ禮義を考て愚痴貪欲の耻かしきを知るべし又筆算之類世に用立諸藝は學ぶにしくは有べからず村里の内禮義を以て相交り年頭節旬之祝儀寒暑時候の尋互に實情を以て往來すべく凡私之集會は齡を尊び大抵老人を上座に進め辭義作法丁寧にすべし或は不仕合にて家貧しく生理通りたるか又は不圖災難に出逢て苦みなやむ者あれば親類打寄りて救ひ恤むべし又吉凶之事有る時は組合講中之人々寄あつまりて其禮を助け調ふべし農業は民の命なれば朝は早く出て暮は遅く歸り晝茅夜綯しはらくも怠るべからずをこたれば自飢を招く聊も人の物盜取べ

からず博奕賭の諸勝負假初にも翫ぶ事なかれ人と争ひ訴ふるは誠にやむとを得ざれば也是を好みて人を誘ひ上下を惱するの類は輕からぬ惡事なれば堅く其黨に不可入をよそ惡しき人はよき人を敬ふべし己之惡を以て人の善を凌ぐべからず富たる者は貧しきを憐むべし己の富をもつて人の貧を吞となかれ路を行にも年少きもの品卑きものは年高き者品尊き者に譲るべし荷輕き者は重きに避け事濟て歸る者は事有て出る者によくべし凡田地の界は相譲りて侵奪ふと有るべからず山林家屋鋪の類にても各其界の有べければ争ひ論するとなかるべし凡若き者は老たる人の爲に重き物を負運び常にその勞にかはりて勤動き最早年たけ頭に白髮の生ひたる人には荷持の業をさせしめず誠に如此行はるれば禮義の風俗にして美しき習はせなるべしとなり

春草堂主人譯並書

右は唐土古靈の陳先生名は襄といふ賢人仙居といへる地の奉行職たりし時支配下の民を教られける文なり此教はかしこくも天地の道理より出て

聖人の立給へる御掟なれば人として遁るまじき職分なり各謹み守りて背くと有べからず人々此教に遵びなば天地の御心にかなひ神もひそかに惠み給ふべければ萬の災もなく其里富榮て人の命もながく各其所を得て樂まざる者有べからず若又た此教にそむきて人倫之道を亂り公事訴訟を好み博奕盜賊の業を習ひて萬よからぬ方に迷ひゆかば面は人なれども心は鳥獸になり下りて彼天職を侮り棄れば縦令上の御咎を免るゝ事有とも必天地の御怒ありて神もひそかに罰したまふべければ貧窮饑饉の患もまねき來すべしされば吉凶榮辱まことに雲泥萬里之差なれば能く思ひわきまふべき事にこそ杏翁識

補遺

廣島縣事務官法學士桑原八司君近頃縣下比婆雙三二郡を巡視して傍杏坪先生の遺蹟を訪ひ歸郷の後余が爲に説きて云はく比婆郡内到處老柿樹多く收實尙夥しくして大いに生計を資く是れ皆先生の賜にして民人尙餘徳を慕へり先生は又栗樹を植ふしめられ今尙諸處に栗林を見る先生が命じて修築せしめられたる用水池も甚多し雙三郡君田村大字曠田に高輪寺、岩敷、馬名所、落畑の四家あり今現に南部種馬を養ふ是れ實に先生の遺業なり柿樹の如きも概ね不毛の空閑地を擇みてこれを植ふ耕種の障害無からしめられたる等用意の周到なる感服の外なしと今や校正の筆を擱くに當りてこゝに録して補遺と爲す先生の事蹟この書に佚せるもの多かるべし江湖博雅の士幸に報道を惜むこと勿れ

明治四十一年七月二十一日

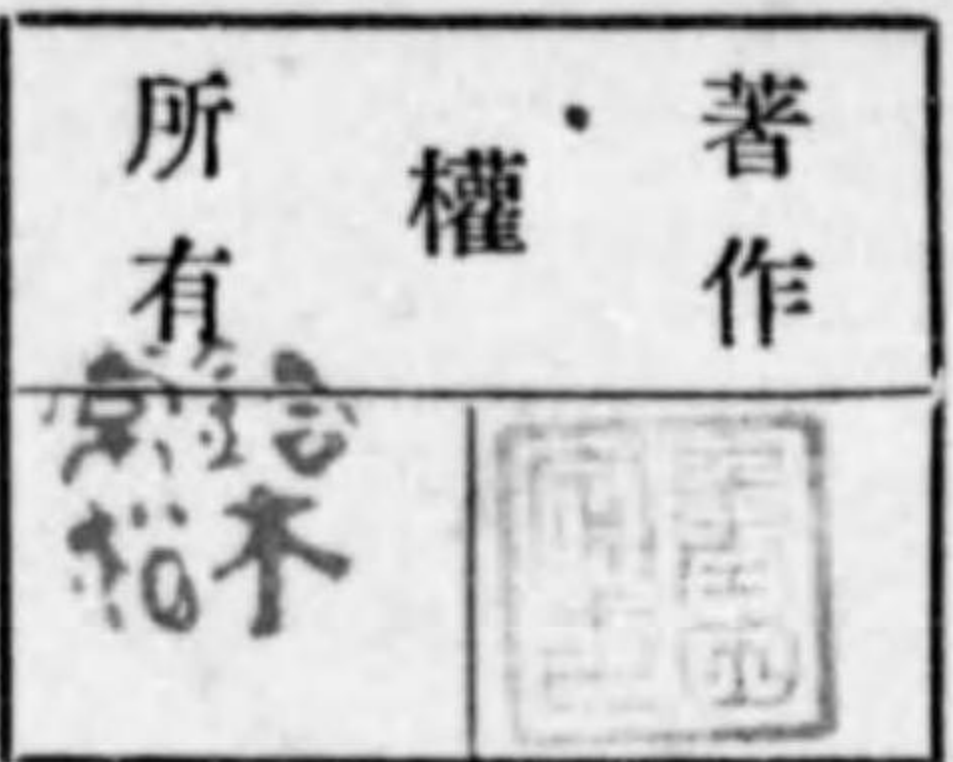
播磨林田の對翠軒に於て

著者 識

明治四十一年八月十七日印刷
明治四十一年八月二十日發行

(賴杏坪先生傳典附)

定價金壹圓五拾錢



著者

重田定

一

發行者

鈴木常

松

印刷者

市川七

作

印刷所

博文館印刷所

所

發兌元

廣島市鹽屋町八番邸

積善館支店

發賣元

東京日本橋區本町三丁目

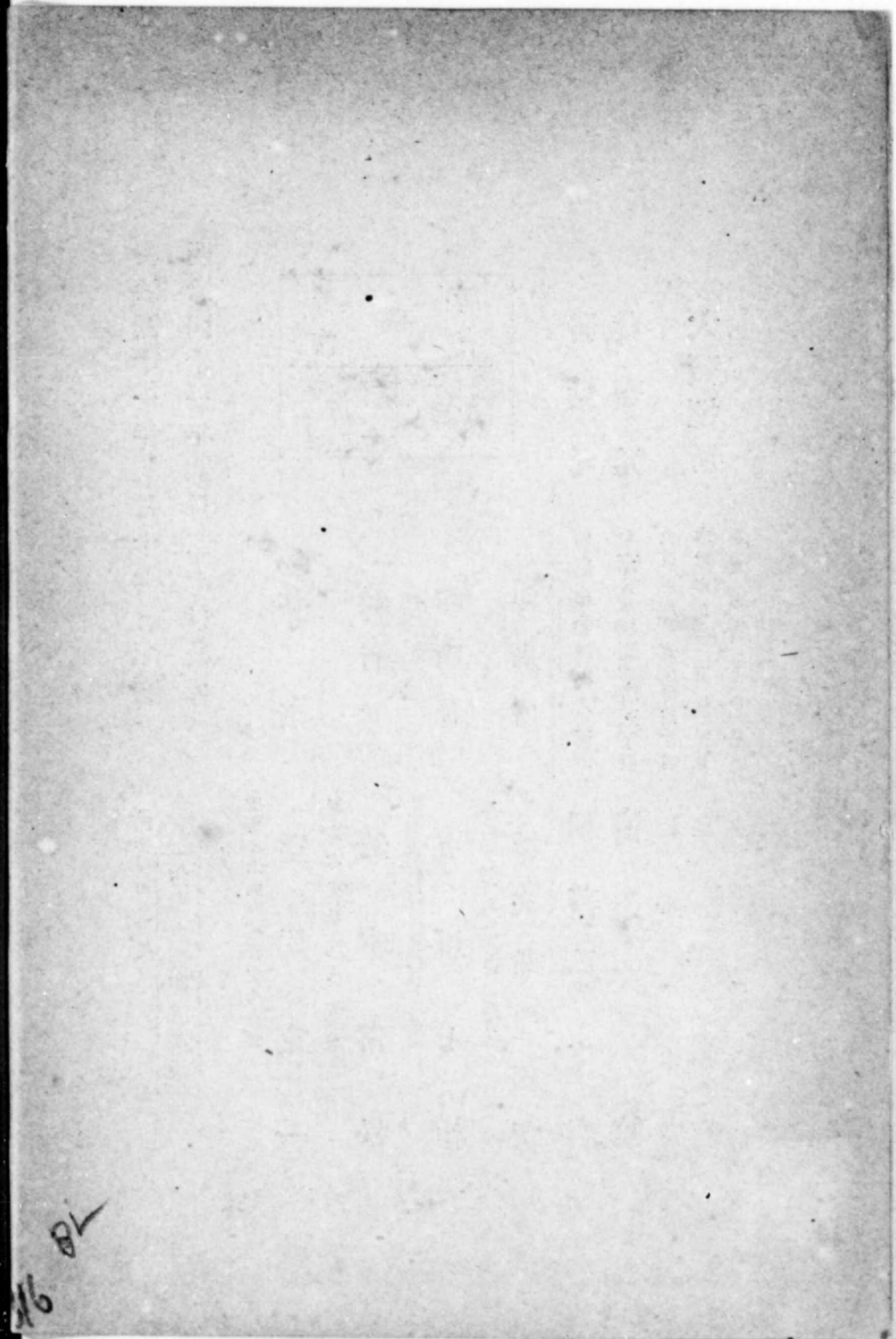
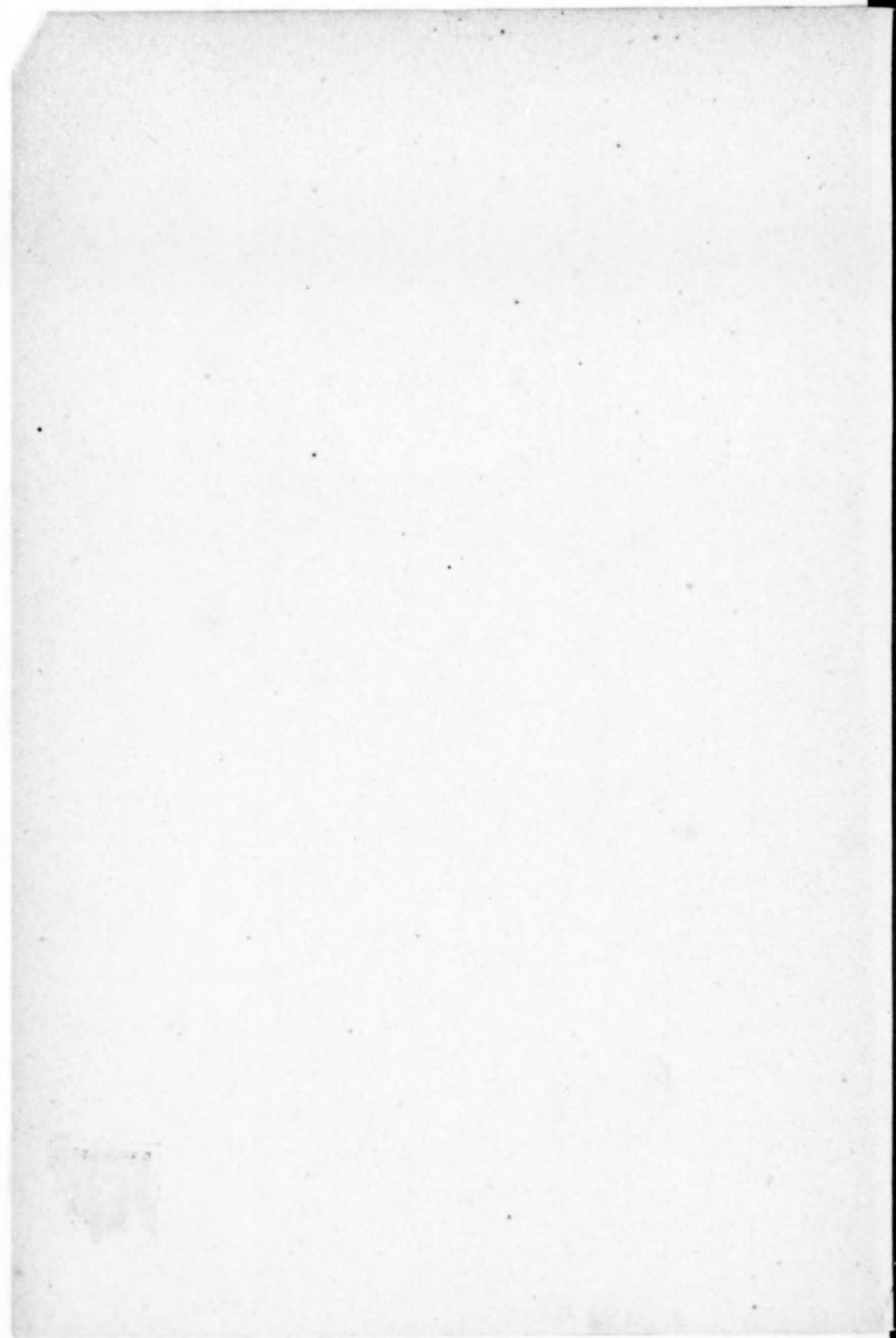
博文館支店

大賣捌所

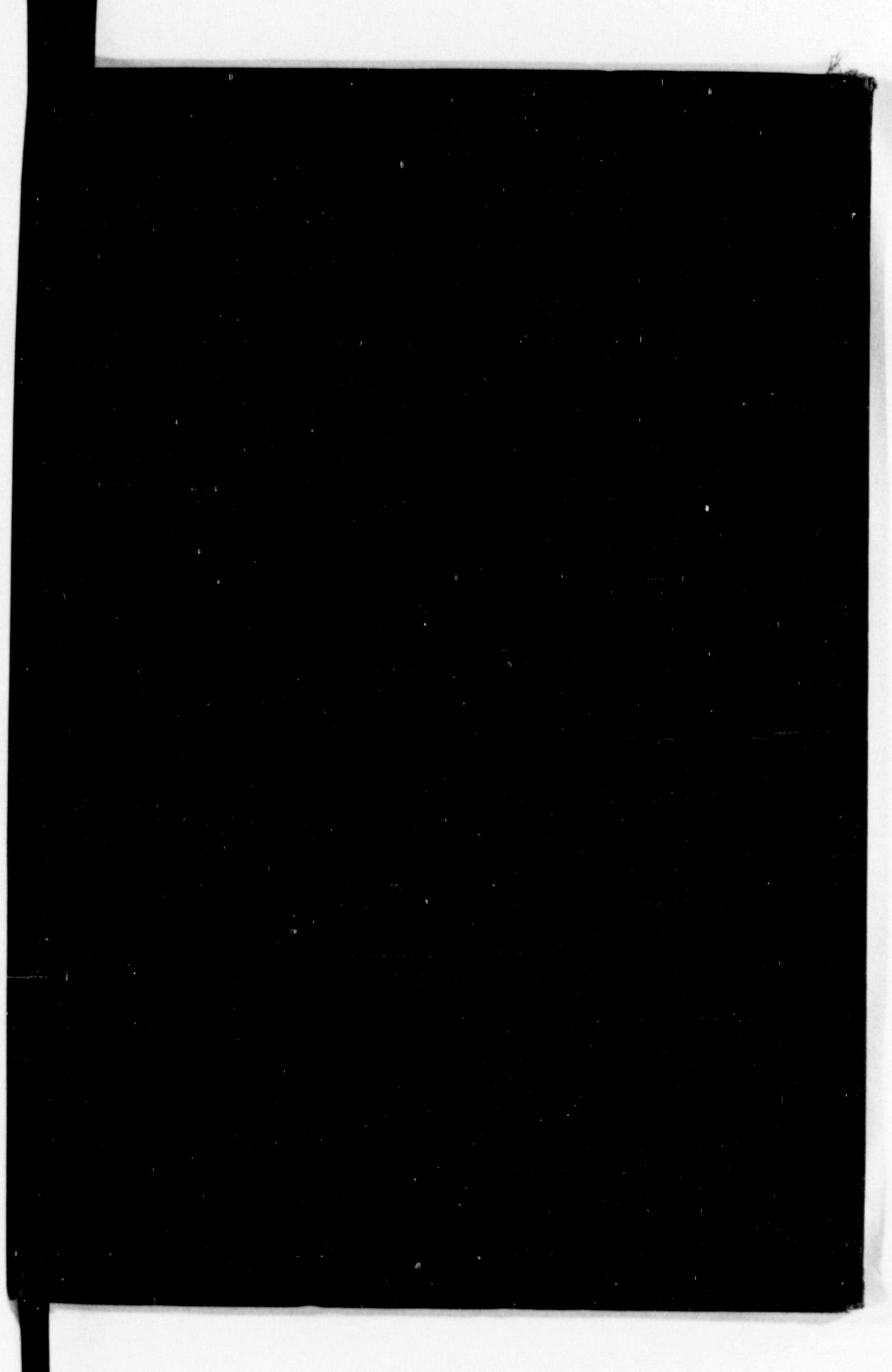
大坂市東區安土町四丁目
大坂市北區東梅田町
福岡市博多中島町

積善館本
積善館支

店



16 BL



007513-000-5

289.1-R152Sr

賴杏坪先生伝

重田 定一/著

M41

ACK-1345



一般資料